

# hyphen no. 7

## 【年次報告】

西川 耕平 制度的なものとしての DG-Lab.....1

## 【論考】

山森 裕毅 スキゾ分析と反精神医学.....4

伊藤 幸生 東大入試現代文における「無意識の思想」とドゥルーズ哲学.....12  
～論理と〈像〉で読む東大現代文～第1回

## 【研究ノート】

有馬景一郎 主観性の生産と夢 ガタリの夢のテキストを中心に.....23

# hyphen

## no. 7

**[Annual Report]**

Kohei Nishikawa DG-Lab as an "Institution".....1

**[Articles]**

Yuki Yamamori Schizoanalysis and anti-psychiatry.....4

Yukio ITO "The Thought of Unconsciousness" in the University of Tokyo's Entrance Examinations in Japanese and the Philosophy of Deleuze .....12  
— Reading UT's Entrance Exams. in Japanese by Logic and "Images"

**[Articles]**

Keiichiro Arima Felix Guattari's Production of Subjectivity and The Dream.....23

---

## 【年次報告】

### 制度的なものとしての DG-Lab

西川 耕平

---

2020年の春に初めての緊急事態宣言が発出されてから、すでに2年以上が経った（この原稿は2022年8月に書いている）。DG-Labの研究会も2020年の5月以降はオンラインツールを用いての開催が常態化することとなった。

この環境の変化は、私個人にとってはラボとの関わりを深める大きなきっかけとなった。コロナ禍の始まる前、ラボの研究会は基本的に関西で開催されていたため、関東在住の私にとっては気軽に参加のできない会合だった。それが、自宅に居ながらにして議論に加われるようになったのである。もちろん、研究会の後に二次会を開けないことには一抹どころではない寂しさを覚え続けているが、画面越しであろうとドゥルーズとガタリの哲学や思想について様々に語り合うことの愉しみに変わりはない。

そういった次第で研究会に継続的に参加するようになったのだが、気が付いたら2022年の3月からは執行部の一角を占めることになっていた。それまでの得能、佐原、内藤の三名から、平田、内藤（※留任）、西川の体制となった。こういった会の運営役に携わることはあまりなかったためやや不安ではあるものの、ラポルド病院でガタリの無茶振りにおそらくはかなり悩まされていたと推測される職員に比べれば、だいぶマシだろうという気にもなる。

そして、運営側に回ってみるとそれまでは見えてこなかったものも見えてくる。私は最近、このDG-Labを「制度」の一例と考えることができないかと思うようになった。ここで「制度」という言葉を綿密に定義することはしないが、ガタリ的な側面を強調すれば「集団的」だとか「横断的」といった要素をその構成要件として考えることができるだろうし、ドゥルーズ的には禁止や制限を退ける「肯定的な企て」を実現する場として捉えることができるだろう。ドゥルーズとガタリは「シメール」という雑誌を共同で編集していたこともあったが、そうしたことも制度的な試みの一つとみなすならば、この会誌『hyphen』もそれと同様なものと考えてよからう。

会誌については脇に置いておくとして、いわゆるアカデミズムの内部にその身をおいているのではない市井の方々が研究会に

定期的に参加していることは、このラボが大学という制度とは異なる横断的で集団的な制度であることを示している。また、ラボ発足の動機である「ドゥルーズとガタリに関心をもつすべての人々が継続的に集まり、議論を交わすことのできる場を設ける必要がある」という考えを、このラボを駆動する理念と捉えるならば、現状、不十分ではあるものの一定程度その肯定的な企てを実現することができていると言ってよさそうである。

不十分な点としては、何らかの仕方でも大学に身を置いているメンバーの割合がそうでないメンバーに比べて高いことや、研究会において専門知を有する人の発言がどうしても重視されてしまうといったことが挙げられるだろう。さらには、「ドゥルーズ・ガタリ・ラボラトリ」という名を冠するにもかかわらず、ドゥルーズ研究者に比してガタリ研究者のメンバーが少ないこともラボの抱える問題として意識させられる。

しかしこの最後の点に関していえば、2021年はラボの発足以来、ドゥルーズでもなくドゥルーズ=ガタリでもなく、ガタリに関わる研究発表が最も多い年であった（7件中3件）。その再評価が進み、2022年3月にはガタリを対象とする本邦初の論集が刊行されるに至ったことをあえて考慮から外したとしても、ガタリに主軸を置く参加者が増え、研究会の内容がより多様化することは、ラボの看板をまっすぐ立てるためにも、この上なく望ましいことである。

2021年はドゥルーズとガタリの芸術論をテーマとしたためもあってか、読書会の内容も多様で、色々なテキスト（『ブルーストとシーニュ』、『襞』、『無人島の原因』、『消尽したもの』、『カオスモーズ』、『哲学とは何か』）に触れる機会を得られた。芸術それ自体についてももちろんのこと、芸術と哲学の関係や芸術のアクチュアリティについてなど、進行担当者のテーマ設定を受けて、様々な議論を交わすことができた。その意味では、2021年の研究会は総体的に見て横断的であったとすることができるのではないかと考えている。

すでに2022年も半分をすぎ、本年は刊行50周年となった『アンチ・オイディプス』を読み継いでいる。50年前の本なのでも

はや「現代思想」ではなく「古典」と言った方がよい気がするが、それでもなお同書を読む現代性（アクチュアリティ）は失われていない。個人的にはそうした直観を抱いている。しかし、いくら読んでも慣れきることのない彼らの難解な文章に単独で向き合うのは骨が折れる。だからと言うわけではないが、集団で多方向に折れ曲がりながらテキストの理解を深めていくこと、その思想を拡げていくことが重要なのである。

## 2021年活動記録

### 第36回 DG-Lab 研究会

【日時】2021年1月23日(土) 14:00-17:30

【使用アプリ】Skype

【読書会】ジル・ドゥルーズ『ブルーストとシーニュ』第二部 結論(進行:内藤慧)

【研究発表】佐々木晃也「純粹に光学的な世界」とは何か:第三のスピノザ論について

### 第37回 DG-Lab 研究会

【日時】2021年3月13日(土) 14:00-17:30

【使用アプリ】Skype

【読書会】ジル・ドゥルーズ『巽』第九章 新しい調和(進行:佐原浩一郎)

【研究発表】平田公威『『哲学とは何か』における人間諸科学の位置と意義について』

### 第38回 DG-Lab 研究会

【日時】2021年5月15日(土) 14:00-18:50

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ「無人島の原因と理由」(進行:得能想平)

【研究発表1】有馬景一郎「ガタリの『分裂分析的地図作成法』における「四機能素」について

【研究発表2】山森裕毅「スキゾ分析と反-精神医学」

### 第39回 DG-Lab 研究会

【日時】2021年7月3日(土) 14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ「消尽したもの」前半(『消尽したもの』白水社、7-24頁)(進行:佐原浩一郎)

【研究発表】尾谷奎輔「「存立性」概念を基軸としたフェリックス・ガタリにおける存在論の形成」

### 第40回 DG-Lab 研究会

【日時】2021年8月28日(土) 14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】フェリックス・ガタリ『カオスマーズ』「7. 生態哲学(エコゾフィー)の対象(後半)」(進行:香川祐葵)

【研究発表】西川耕平「ドゥルーズの講義録にみられる研究と教育の実践」

### 第41回 DG-Lab 研究会

【日時】2021年11月20日(土) 14:00-17:30

【使用アプリ】Zoom

【読書会】ジル・ドゥルーズ+フェリックス・ガタリ『哲学とは何か』第七章 被知覚態、変様態、そして概念(進行:平田公威)

【研究発表】立花達也「ドゥルーズのスピノザ解釈における最も単純な物体をめぐる論争:リヴォーとゲルーへの応答を中心に」

## 【論考】

# スキゾ分析と反精神医学

山森 裕毅

### ■はじめに

この論考はフェリックス・ガタリが『アンチ・オイディプス』以降にスキゾ分析をどう更新していくのかを考察するものの一編である。ここではガタリの反精神医学批判の観点からスキゾ分析について見えてくるものを明らかにすることを旨とする。そのため本稿では『分子革命』をメインのテキストとして扱う。

論を進めていく前にまず『分子革命』という本について簡単に確認しておきたい。『分子革命』はガタリが発表した論考や評論などの集成として一九七七年に Recherches から公刊されたものが最初の版である。一番古い論考の初出は一九七二年となっている。本の構成としては次のおおよそ五部に分けられており、それぞれに四本以上の論考がまとめられている。

第一部：分子革命と階級闘争

第二部：司法と日常的ファシズム

第三部：追い払う

第四部：映画：マイナー芸術

第五部：記号論の漸進的構築

この後、一九八〇年に『分子革命』は 10/18 叢書から版を改めて公刊される。そのなかでは、とりわけ映画論と記号論にかなるものを中心に多くの論考が外され、かわってイタリアの政治状況に対する時事評論などの一九七九年までの論考が追加されることになった。構成も次のようにコンパクトに再編されている。

(1)

第一部：分子革命と階級闘争

第二部：囚人護送車のヨーロッパ、そして／あるいは自由の新しい空間のヨーロッパ

第三部：欲望と日常生活のミクロ政治学

さらに『アンチ・オイディプス草稿』の公刊でも尽力したステファヌ・ナドールの編集で、二〇一二年になって『分子革命』の新版が Les prairies ordinaires から公刊されている。この版の特色は、10/18 版で外された論考を再掲載したうえで、さらに

Recherches 版や 10/18 版で掲載されていた各論考の削除されていた部分を補っているというところにある（版の更新の際にガタリが行った用語の修正にまで細かく目配りしている）。いわば『分子革命』の完全版である。構成はおおよそ五部に分かれていて、Recherches 版と 10/18 版の章立てを組み合わせられたものとなっている。

第一部：分子革命と階級闘争

第二部：囚人護送車としてのヨーロッパ

第三部：欲望と日常生活のミクロ政治学

第四部：映画：マイナー芸術

第五部：記号論の漸進的構築

以上のように『分子革命』は、その変遷の副作用として、どの版を使うかで読みの印象に大きな違いが生じてしまうという事態となった。このことを意識しつつ、情報量の充実の観点から、ここではナドール編集の版をテキストとして使用する。

それでは本論に入っていこう。この論考の基底となる問いは「スキゾ分析にとって『分子革命』とは何だったのか」である。そしてこの問いに明確に答えるのは難しい。というのも『分子革命』のなかには「スキゾ分析」という語がほとんど登場しないからである。ではここで書かれていることがスキゾ分析と何の関係もないかといえば、そうではないだろう。明らかに『アンチ・オイディプス』から引き継がれたスキゾ分析にかかわる主題があり、また『機械状無意識』や『千のプラトー』などに引き継がれていく主題がある。ここではその主題のなかからひとつを選んで、スキゾ分析との関係を論じていきたい。それは「反精神医学」である。

### ■反精神医学概説

なぜ反精神医学を本稿の主題として選ぶのか。それを理解するためには、反精神医学とは何かを知っておくのがよい。

まずは大づかみで捉えておこう。「反精神医学」とは、一九五〇年代からはじまった精神医学への対抗運動にデイヴィッド・クワ

パーが与えた総称である。おもに欧米で展開され、イギリスではロナルド・デイヴィッド・レイン（精神科医）、デイヴィッド・クーパー（精神科医）、アメリカではトーマス・サズ（精神科医）、イタリアではフランコ・バザーリア（精神科医）、フランスではモード・マノーニ（精神分析家）、ドイツではSPKグループ（患者の集団）<sup>(2)</sup>がそれぞれ活躍した。各地での運動にはそれぞれ個性があるが、運動で共有されていた大きな柱としては、精神科医の権力の抑制（ヒエラルキーの破壊）、治療よりも隔離収容に重心を置く病院環境の打破、病院スタッフの労働環境の改善、薬物や電気ショックなどの患者に負担の大きい療法の撤廃などがあり、その根底には「精神医学という名の暴力」からの患者の解放という理念があった<sup>(3)</sup>。

思想的にはもちろんさまざまな先人の考えを取り込んではいいるが、なかでも統合失調症者が家族と取るコミュニケーションの様式を研究したグレゴリー・ベイトソンのダブルバインド論（1956年）や、アメリカの巨大精神病院をフィールドワークしたアーヴィン・ゴフマンの『アサイラム』（1961年）、狂気や狂人に対する認識と処遇の歴史の変遷をたどったミシェル・フーコーの『狂気の歴史』（1961年）、そしてサルトルの実存思想から受けた影響が大きい。また少なからず精神分析の影響を受けてもいる。

運動としては一九七〇年代に下火となっていき、現在その名を聞くことは少なくなったが、当時の著作を読むと、このとき育まれた思想のいくらかは今でもインパクトを持っているように思われる。とくに精神病院数が多く、薬の多剤大量処方への改善が進まず、身体拘束や電気ショック療法が増えてきつつあるといわれる精神科医療後進国の日本で、今になってバザーリアの思想や活動が耳目を集めているのは興味深い。

なぜ本稿で反精神医学を主題として選ぶのか。それはガタリの活動が（すべてではないにせよ）この運動と連動しているからである。より詳しいことは後で言及するが、たとえば『アンチ・オイディプス』では、狂気の経験について論じる重要な箇所ではレインの思想に言及している。このためか『アンチ・オイディプス』は反精神医学の文脈に置かれることもある。しかしこの著作は反精神医学への厳しい批判点も少なからず挙げている。そしてガタリの著作群のなかで反精神医学とその関連領域への批判にもっとも多くの紙幅を割いているのが『分子革命』なのである<sup>(4)</sup>。一九七〇年代にガタリは、一方で制度精神療法・制度分析の牽引者かつ実践者あり、他方でスキゾ分析の提唱者かつ実践者であるという自身の思想的な立ち位置を定めるために、精神分析だけでなく反精神医学との距離も測る必要があったのではないだろうか。本稿は、ここにスキゾ分析をよりよく理解するためのヒント

があると思う。その事情は細かくて複雑なのでこれから少しずつ紐解いていくことにしたい。

## ■反精神医学における病いとその病者について

反精神医学の特徴についてここから少し精度を上げて見ていこう。もちろんそのすべてを網羅的に取り上げることはできないので、ここではおもにクーパーとレインの議論を導きの糸として、スキゾ分析との関係で論点となる特徴にだけ焦点を当てることにしよう。

まず取り上げたいのは、精神の病い（おもにスキゾフレニー）とその病者についての捉え方である。反精神医学の名づけ親であるクーパーは次のように考えていた。彼の著書『精神医学と反精神医学』（1967年、邦題は『反精神医学』）によれば、統合失調症は特定の症状を示す個人に医療者が貼るラベルであり、このラベルの貼り方に精神医学の暴力性がある。というのも統合失調症は、個人のなかに実在するものではなく、人々が相互にかかわり合っているミクロ社会的な状況の欠損によって生じるものだからである。その欠損とは、離脱するのが容易ではないある集団（クーパーにとってはとりわけ「家族」）のなかで、そこに属しているひとりの人物（ほとんどが息子・娘）の志向性が何らかの仕方でも否定され無効化されることを意味している。言い換えれば、ひとつの集団のなかである特定の人物の考えや言動が、集団内の「非本来的」とも形容される歪な相互作用によって、意味のないものにされるということである。そしてこの無効化をどうにかしようとしてその人物によって新たに採られる考えや言動が、集団内のその他の人々にとって「異常」や「妄想」とされてしまう。さらにそこに精神医学のラベリングの暴力が重なって、ひとりの統合失調症患者が生み出されることになる。

『精神医学と反精神医学』ではこのような発想がベイトソンやサルトルの用語で論じられていくが、クーパーの要点は、家族のような集団内の歪な相互作用から逃れようとして採られる対応が人を病者にすると同時に、そのことでこの歪な相互作用がむしろ見事に維持されてしまうということである（なぜなら「意味のない言動や行為をするのが精神病者だ」とされてしまうから）。つまりクーパーの考える統合失調症とは、「障害を受けている集団の行動様式の多かれ少なかれ特徴的なモード」<sup>(5)</sup>のことであり、またその状況を生きるその病者にとってのチェックメイト状態を意味しているといえる。

レインもまたベイトソンの影響からか、病者の家族内コミュニケーションに関心を持ち、アーロン・エスターソンとともに実際に調査を行ったが、クーパーのようにそれを病因のように論じることはなかった。レインが関心を持っていたのは、ヤスパースが

了解不能と規定した精神病が本当にそうなのかということだった。たとえば最初の著作『引き裂かれた自己』(1960年)の冒頭で、実存的-現象学的方法を用いることで「狂気には至っていないスキゾイド的な世界内存在の在り方から精神病的な世界内存在の在り方への了解可能な移行があることを示すつもりだ」<sup>(6)</sup>と述べている。『狂気と家族』(1964年)で家族内コミュニケーションを調査したのも、単独では奇妙なものでしかない病者の言動も、家族というシステムのなかで生じていること(過程)と、そこで誰が何をしているか(実践)を丁寧にたどれば、了解可能(可知的)になるのではないかと考えたためである<sup>(7)</sup>。この問いを探究することを通してレインは、精神病を了解不可能なものとして社会の外部に(つまり閉鎖的な精神病院に)その病者を排除しようとする精神医学に抗おうとしたといえるだろう。

レインの思想において重要な点をもうひとつ押さえておこう。それは統合失調症にかんするものである。『経験の政治学』(1967年)にあるように、レインもクーパー同様に統合失調症をひとつのラベル、レッテルと考えている。そのようなレッテルが貼られることになる社会的な事実、政治的な出来事があるのであって、「統合失調症」という「状態」は存在しない<sup>(8)</sup>とまで主張している。しかし、その一方で実存的な意味での「スキゾフレニー」を精神医学の診断上のそれと区別して、前者を自然治癒の過程や「旅」として捉えてもいる。これはクーパーがチェックメイト状態としてだけ統合失調症を捉えていたことと比較すると大きな違いである。このポジティブな捉え方が『アンチ・オイディプス』のスキゾ分析に多大な影響を与えることになった。しかし、レインの考えるこの「旅」は、ガタリ(およびD-G)がスキゾ分析で思い描くものとは実は根本的な部分で異なっている。重要な論点なのでこの点については後で丁寧に論じることしよう。

### ■ 治療観、および病院に対するオルタナティブ

反精神医学における病気・病者観に触れたが、ではそれと関連する治療観はどのように考えられているのだろうか。またその治療観に基づくと病院のような治療施設はどのような形になるのだろうか。

上で記したように、運動の基本的な姿勢としては、病院での拘禁・拘束や薬物療法、電気ショック療法など、心身ともに負担の大きい対処や治療から患者を解放することが目指される。このヴァリエーションとしては、ラカン派の分析家で反精神医学に強く共感したモード・マノーニがこの運動の要点を「狂気という言葉に、はばかりことなくおのれを言い表すことを許すような諸条件を確立しようと努める」こと<sup>(9)</sup>に見出している。マノーニは一九六九年に精神病や精神薄弱、発達遅滞などの問題があるとされる

子どもたちを集めたボヌーイ・シュル・マルヌ実験学校を開き、反精神医学の観点からの運営に努めた。さらにイタリアでは、バザーリアが牽引した運動によって、法律に基づいた公立の精神病院の全面閉鎖へと至っている。その代替としては地区割の地域精神保健システムが展開されている。

ではクーパーの場合はどうだろうか。少し詳しく触れておこう。彼は統合失調症を、歪な相互作用を維持している集団(とりわけ家族)の行動様式と考える。そのため、その治療は「家族内に現在ある相互作用のパターンを修正する試み」<sup>(10)</sup>となる。それは医療者の介入を前提としつつ、次のようなものとなる。

[治療とは]家族のメンバーがお互いにかかわり合いながら自分たち自身を修正するよう、管理された状況を供給することである。それは、少なくとも精神病と判断されるような崩壊(breaking down)にならない程度で、一方では患者にさせられたメンバーが自身にとって自律的といえる行為の範囲を徐々に見出していき、他方では同時に家族の他のメンバーがもっと「自己充足的」になるという仕方において、である。<sup>(11)</sup>

これは具体的には個人面接や家族面接を組み合わせ、家族内で繰り広げられている歪な相互作用のパターン(特定の人物を無効化するパターン)を明らかにし、また無効化されて患者にされてしまった人物の自律(家族からの相対的な離脱)を促すことで、そこで採られていたパターンを修正していく実践と要約できるだろう。一見、非常にシンプルな対応ではあるが、実際には非常に時間のかかるものとなるだろう。またそれだけでなく、クーパーはこの治療実践のなかに反精神医学的な考え方を持ち込んでいる。というのは、この過程が進むなかで、患者が危機的な局面を逃れるための戦略として、自己をバラバラに解体して再統合すること(死ぬことによって状況を抜け出し、その後復活再生すること)を望む場合に、精神医学がその糸口を与えるべきだと考えるのである。ここでいう「解体」が人格の荒廃などの病気の増悪を意味するのであれば「再生」が実際に起きるかどうかわからない非常に危険な実践となるため、一般的な医療者であればこれを積極的に支持するようなことはしないだろう。

以上がクーパーの治療観の概略であるが、こうした考えに基づく治療の実験として、彼はシェンリー病院内にある病棟 Villa 21 のなかに反精神医学的な発想で動く小規模のユニットを作っている(活動期間は一九六二-六六年)。

### ■ 回復の旅としての狂気

最後にレインの場合を重点的に見ておきたい。彼のモノグラフ

を著したズビグニェフ・コトヴィッチも書くように、レインは自身の治療実践にかんする詳しい説明を著作のなかにほとんど残していない。これは彼の関心が病者の了解可能性の探求にあったからだろう。彼の著作群から精神病理の理論を整理し、そこから治療実践を導き出すことはできるかもしれないが、それは本稿の目的ではない。実際、レインの独創性はその治療観にではなく、スキゾフレニーを自然治癒の過程と捉えたことにあるのではないだろうか。

その発想が登場したのは『経験の政治学』においてである。その第五章「スキゾフレニックな経験」のなかで、レインはまず「統合失調症」者とは精神医学によってレッテルを貼られた人のことであり、統合失調症とは社会が作り出した事実にすぎず、統合失調症と呼ばれる状態は存在しないという。次に、医療者がそのレッテルを貼って治療している人たちの幾人か（すべての人でもないし、多くの人でもない）に、奇異な言葉や身振り、行動を見るが、これはある経験のシークエンスの挫折型であって、そのシークエンスとは潜在的な自然の過程である、そしてその過程を挫折させているのは善意を持って治療に努めている医療者である、と議論を進めていく。ついにはこの潜在的な自然の過程が自然治癒の過程であるという見解に達する。

この過程とはどのようなものなのだろうか。レインは、私たちの経験が外的世界と内的世界に分裂しているという前提に立って論じはじめる。理解を阻むのは、何を基準に外／内と表現しているのかをレインが説明していない点である。とりあえずここでは、外的世界とは日常的に私たちが接している現実世界のことであり、それに対して内的世界とはこの現実世界との接触を断ったような別の現実世界と考えておこう（少なくともレインは「自分の内面にある世界」とは表現していない）。このとき過程は、この世界（外的世界）から別の世界（内的世界）へ入っていく過程として、また別の世界からこの世界へと帰ってくる過程として説明される。このような二つの世界を往還する過程は「旅」とも呼ばれ、次のようにまとめられている。

#### 【行きの旅】

- ①外から内への旅
- ②生から一種の死への旅
- ③前進から後退への旅
- ④時間の進展から時間の停止への旅
- ⑤世俗的な時間から永遠の時間への旅
- ⑥自我から自己への旅
- ⑦外側にあること（出産後）から、万物の子宮の内部（出産前）への旅

#### 【帰りの旅】

- ①内から外への旅
- ②死から生への旅
- ③後退からもう一度前進への旅
- ④不死から死ぬべき運命〔人間〕へ戻る旅
- ⑤永遠から時へ戻る旅
- ⑥自己から新しい自我への旅
- ⑦宇宙的な胎児化から実存的な生まれ直しへの旅<sup>(12)</sup>

この旅のなかで本節にとって重要なのは【行きの旅】【帰りの旅】の⑥である。この旅が「スキゾフレニックな」経験と呼ばれるのは、それが自我の喪失あるいは解体の経験だからである。ここでいう自我とは何だろうか。レインは同じ著作の第六章「超越論的经验」で次のように説明している。

多くの人々がほとんどの時間、私が自我的と呼ぶであろう何らかの仕方で、自分や他の人々を経験する。すなわち、ハッキリであれボンヤリであれ、彼らは、そこにいる-あなた(you-there)に向かい合っているここにいる-私(me-here)という一貫した同一性によって、彼らの社会の他のメンバーと共有している時間と空間についての確かな基礎構造のフレームのなかで、世界や自分たちを経験するのである。<sup>(13)</sup>

引用によれば、自我とは「ここにいる-私」の同一性によって自分や他人、この世界を経験するひとつの安定した仕方と考えられる。すると自我の解体とはこの世界を経験する基礎構造を失うことを意味するだろう。このときひとは狂気に陥っているといえるが、レインによればそれは病的なものではなく、この世界を「突破」(break-through)<sup>(14)</sup>して別の世界に直面している状態である。さらにこの突破の意味を問うならば、それは【行きの旅】の③と⑦にあるように時間、あるいは生の「遡り」である。遡る理由は、【帰りの旅】の⑦にあるような生まれ直しのためとなるだろう。そしてこの生まれ直しによって、旅人は新しい自我を再建することになる。この再建がレインにとっての回復の意味である。要するに、自我の喪失から自我の再建に至るまでの過程が自然治癒の過程であり、またスキゾフレニックで超越論的な経験、病的ではない狂気、旅と呼ばれるものなのである。

このような考えに至ったレインは、このような旅が可能となる場所を作ろうと動き出す。それがキングスレイ・ホールである。キングスレイ・ホールは病院ではない。ロンドンの郊外にある三階建てのレンガ造りの建物で、レインはここをまるまる借り切っ

て、病者だけでなく、レインを含めた医師やスタッフ、その他の人々が寝食をともにしながら、病者たちが狂気の旅に没入できる共同体を作ろうとした（しかしレイン自身は一年でここを引き払っている）。共同体は民主的に運営され、病者の自由度も高ったようである。そのためか、夜間の騒音など多くのトラブルによって地域住民からはよく思われておらず、窓ガラスを割られるなどの嫌がらせも受けた。警察からも警戒されていたという。この活動は一九六五年から七〇年まで続けられた。ここでのことは、自身も住人で回復の旅を実践していたメアリー・バーンズの著書『狂気をくぐりぬける』（精神科医ジョセフ・バークとの共著）で多くを知ることができる。

### ■ガタリの反精神医学批判

反精神医学について本稿に必要な程度の整理ができたので、ここからガタリがどのように反精神医学に対して批判の論陣を張ったのかを『分子革命』を中心に見ていこう。

まず、そもそもガタリの思想や実践が反精神医学に分類されるのかどうかを確認しておきたい。大雑把に捉えるならば、そうともいえるだろう。ガタリがジャン・ウリとともに運営に努めたラ・ポルド精神病院は、精神分析の知見を導入して医療環境を制度の観点から改善し、患者の拘束を解き、外部から多様な人たちを招き入れつつ、狂気に語る場を与えるという実験的な実践の場であった。ここにはバザリアが訪れてもいる。それだけでなくレインやマノーニとも交流を持ち、自分たちの主宰する雑誌『ルシエルシュ』に論考を寄せてもらってもある。これだけを見れば、彼らのあいだで大きな意味での方向性の共有はあっただろうと考えられる。

しかし、ガタリは「スタイル」<sup>(15)</sup> という表現で、それぞれの活動の違いを感じていた。たとえば、ラ・ポルド病院は電気ショック療法を採用し続けた点で、反精神医学の趣旨からは外れていたといえるだろう。ガタリ個人でも『精神分析と横断性』に収められている「精神医学のゲリラ」という評論のなかでバザリアの見解に反して薬物療法を擁護する発言を残している<sup>(16)</sup>。さらにいえば、ラ・ポルド病院はあくまで病院であるという意味では、イタリアのような精神病院そのものからの解放ともいえる発想から見れば、まだまだ保守的であると思われるもおかしくはない。マノーニもその著作で制度精神療法に対して、その実践が病院の制度の次元に留まっていると批判を述べている<sup>(17)</sup>。しかし、この点にかんしてはやや事情が複雑である。というのも、ガタリにとっての問題意識は病院の制度だけでなく、病院に対するオルタナティブである地区割精神医療サービス（いわゆるセクター制）にもあった。彼は医療権力によるミクロな監視や管理が

セクター制によって住民の日常生活に入り込む危険を『分子革命』のなかで繰り返し指摘した。これは反精神医学的な観点と考えるとよいだろう。要するにガタリの反精神医学の度合いはまだらなのである。とはいえ、ここまではガタリの制度精神療法・制度分析の実践者としての側面に寄った見え方だろう。

### ■スキゾ分析から見た反精神医学

スキゾ分析に寄せて見たとき、ガタリは反精神医学への批判者として現れる。彼の批判はおおよそ次の四点に分けられるだろう。それはエリート主義、家族主義、精神分析主義、人格主義である。それぞれの批判の中身はどうなっているだろうか。

エリート主義批判とは、この運動がほとんどの場合に高度な専門知識とそれに関連する権威を持った精神科医による主導であったことへの批判である。マノーニは精神分析家であったが、それでも高度に知的で、実験校を開けるくらいの権威を持っていたのは確かである。またこの批判の対象にガタリ自身が含まれるだろう。

なぜエリートが運動を牽引することが批判されるのか。たとえばシェリー・タークルによれば、一九七三年頃にフランスのとある精神病院で看護師（看護学生）らによる治療環境の改善の運動が起きたが、知的エリートがこの件に触れず、連帯しようとしなかったという<sup>(18)</sup>。この件にガタリがどの程度関与したのか詳細はわからないが、医師が主導の運動と看護師が主導の運動に優劣が付けられていた例といえるかもしれない。このような運動の主体をめぐる問題にかんしてガタリはどう考えていたかといえば、患者らの当事者(intéressé)が自分たちで声をあげられるようになることが望ましいと考えていた。それは彼の左翼的な経験から来る発想、つまり「自主管理」の思想をこの領域でも重視するというものである（この点で SPK の運動をガタリは高く評価している）。

この議論の重要な点は、ガタリの当事者への関心が病者や労働者に留まらなかった点である。『分子革命』では女性や若者、移民、セクシャルマイノリティ、ジャンキー、子どもなどのさまざまなマイノリティについての話題が登場するが、この時期にマイナーであることへの関心が広がり、『千のプラトー』へと引き継がれていくことになったのではないだろうか（実際『アンチ・オイディプス』では、関心がスキゾプレーヌと革命家と芸術家にほとんど限られていたといえる）。

次いで家族主義批判を見ていこう。これは反精神医学のなかでも特にクーパーに顕著だが、スキゾフレニーの問題を家族の相互作用の問題に還元し、閉ざしてしまう傾向を批判したものである。すでに見たように、クーパーは統合失調症を家族が採っている行

動様式の病的なモードと捉えていたし、家族の歪な相互作用に患者（子ども）の病因があるかのように考えていた。レインもまたエスターソンとの共同調査で家族内コミュニケーションのなかに患者の了解可能性を探ろうとしていた。ここには家族が正常な相互作用を回復すれば、患者は病いから治癒するという発想が見え隠れしている。しかし『アンチ・オイディプス』で展開されたのは、家族内の相互作用が正常かどうかという以前に、家族そのものが個人という病んだ主体を生み出す社会的な（もっといえば資本主義による抑制的-抑圧的な）仕組みであるという主張であった。そして精神分析はこの仕組みに加担する現代的な方法として描き出された。対するスキゾ分析は、この家族なるものからどう出ていくのかにその実践の要点のひとつがあった。そこでは子ども（の欲望）は家族以前に社会野とつながっていて、また家族の非家族的な部分を通して社会野とつながっていくという考え方が提案されていた。以上の比較から見えてくる家族主義批判とは、反精神医学はスキゾフレニーと社会あるいは政治の現実的な関係を捉える視点が欠けていて、そのことで問題が家族という枠あるいは表象を超えることができず、結局は社会的な抑制-抑圧に加担することになっているのではないか、ということである。

この家族主義批判は続く精神分析主義批判ともつながっている。ここでいう精神分析主義とは反精神医学に精神分析の影響が見られることをいう<sup>(19)</sup>。たとえばマノーニはそもそも分析家として反精神医学に歩み寄っていることから、このようにいわれることは避けがたいだろう。レインは精神科医であるが精神分析の訓練も受けており、彼のスーパーヴァイザーのひとりが高名な分析家であるドナルド・W・ウィニコットであった。またキングスレイ・ホールで病者バーンズの世話を担当した精神科医パークも精神分析を学んでいた。『分子革命』のなかの「メアリー・バーンズと反精神医学的オイディプス」によれば、何よりもそのバーンズ自身が精神分析を強く求めていたという。

ガタリにとっての問題は、反精神医学の牽引者たちが精神分析を学んでいたということそれ自体ではない（彼もまた精神分析家である）。問題なのは、彼らが精神医学に向けた厳しい批判的まなざしを精神分析には向けることができなかったということになるだろう。だからこそ結局、キングスレイ・ホールがオイディプスの再演の場になってしまったとガタリは考える。

しかしキングスレイ・ホールに対する真の脅威はむしろ内側からやってくるだろう。人々は修繕可能な隷属状態からは解放されたが、しかし密かに抑圧を内面化し続ける。そのうえ人々は過度に単純な還元支配された例の三角形—父、母、子—に囚われていた。この三角形は、正常といわれる行動の範囲をはみ

出すいっさいの状況をオイディプス的な精神分析の鑄型のなかに閉じ込めるのに使われるものである。<sup>(20)</sup>

引用でいわれる父-母-子の三角形とはキングスレイ・ホールでどのように再演されたのだろうか。ガタリの記述から推測するなら、そのひとつの形はレイン(父)-パーク(母)-バーンズ(子)となるだろう（ある意味でバーンズにとってパークは母であるだけでなく、父でもあり、恋人でもあったという）。しかもこのオイディプス的な状況に引きずり込んだのは、言い換えればキングスレイ・ホールの精神分析主義を引きずり出したのは、病者であるバーンズだとガタリは考察している（「キングスレイ・ホールの真の分析家は彼女である」<sup>(21)</sup>）。レインはキングスレイ・ホールを作ることによって精神病院の壁を突破したが、しかし彼ですらオイディプス三角形からは逃げ切ることができなかった。スキゾ分析はこれを許さないのである。

### ■スキゾフレニーと逃避行としての旅

最後に人格主義批判に触れておこう。これは人格が統合されている状態を健全なものとするところへの批判である。たとえばすでに見たようにクーパーは、患者が危機を逃れるために自己を解体して再統合することに医学的な支援を提供できるように尽力した。レインもまた、スキゾフレニックな経験としての旅の往路が自我の解体や喪失であったのに対して復路が自我の再建というように、解体が最終的に統合に至ることを過程の到達点として設定している。ガタリはこの考え方を批判するのである。『アンチ・オイディプス』で論じられたように、ガタリにとって人格や自我、身体などひとつの個人とくくれるようなものへの形象化は社会的（資本主義的）な抑制-抑圧の成果である。言い換えれば社会が人々を隷属させる手段のひとつが個人を作り出すことだと考えるのである。ガタリはスキゾフレニーにこのような個人という枠を突破する力能を見出したといえるだろう。そのため、クーパーやレインのように人格の再統合や自我の再建を求めてしまうことは、社会的な抑制-抑圧への回帰でしかない。

ここからスキゾ分析について次のようにいえるだろう。スキゾ分析とは『アンチ・オイディプス草稿』では「スキゾフレニーになる方法」であり、また『アンチ・オイディプス』では自我の解体を目指した方法である。つまり、スキゾフレニー（統合失調症）を治療する方法でもなければ、反精神医学のように、歪な相互作用に囚われて病者にされている状況から脱するためにスキゾフレニックな経験を通過儀礼的に経由するということでもない。反精神医学の旅が帰ることを前提とした旅とすれば、スキゾ分析の旅は帰らない旅となるだろう。それは逃避行と呼べるかもしれない

い。というのも、スキゾ分析にとって人格の再統合は社会に追いつかれて引き戻されてしまったことを意味するからである。

旅に関連して、反精神医学とスキゾ分析の違いについてもう一点触れておきたい。レインはスキゾフレニックな経験としての旅を内的世界への「遡り」(going back)と捉えたが、これを精神分析の用語で「退行」(regression)とも呼んでいた<sup>(22)</sup>。幼年期への退行に代表されるように退行とは自身の発達史のある地点へ遡ることを指すが、実際にキングスレイ・ホールでバークは四〇歳代のバーズがさまざまな人生の時期に退行するのを目撃している。これに対してガタリは、スキゾ分析にとっての旅を退行として論じたことはないし、またレインのように内に遡るものとも考えていない。スキゾ分析にとって旅とは『アンチ・オイディプス』のなかでは強度の旅、生成変化の旅として論じられている。つまり、子どもに戻るのではなく「子どもになること」としての旅であり、さらにいえば「動物になること」や「女性になること」など、自分の属性にはなかったがゆえにそもそも遡ることなどできない何かになることとしての旅なのである。

## ■おわりに

本稿の基底となる問いは「スキゾ分析にとって『分子革命』とは何だったのか」であり、これに応えるために反精神医学とスキ

ゾ分析の比較を行ってきた。反精神医学の考え方と比較することで、スキゾ分析の内実の理解には踏み込めなかったとしても、その輪郭をより鮮明に捉えることができるようになったのではないかと考える。とりわけ「自我の解体」について、レインから「この世界を経験する基礎構造の喪失」であると同時に「この世界の突破」という考え方を取り出せたことは、ガタリの著作のなかで曖昧なままであった点が解明に向けて半歩でも進んだといえる点で意味があっただろう。

もちろん半歩進んだだけで満足するわけにはいかない。すると次の問いはこうなる。この世界を経験の基礎構造を失った先に何があるのか。この世界を突破した先に何があるのか。それが人格の荒廃としての重篤な病状ではないとすると何なのか。もちろんそれはここで論じたスキゾフレニックな旅がひとつの答えとなるが、『分子革命』のなかでガタリはさらに別のことも考えている。それは反精神医学の実存的-現象学的方法やコミュニケーション理論では見出せないスキゾフレニーに固有の領域のことであり、彼はその領域を探索するために独創的な記号論を構築していこうとする。私たちが次に追うべきは『分子革命』のこの記号論である。

## 注

1. 邦訳は、まずおもに 10/18 版に基づいて訳出され、『分子革命』として法政大学出版局から出版された。その後、同じ出版社から『精神と記号』というタイトルで 10/18 版で外された映画論と記号論の部分が訳出されている。本の体裁、そしてガタリの政治的言説への期待の大きさが相まって、『精神と記号』は『分子革命』よりも軽い扱いを受けやすいが、この二冊を同じ比重で読むことを推奨しておきたい。特に記号論はガタリの理論変遷を捉えるうえで避けることのできない重要な主題といえる。
2. Sozialistisches Patientenkollektiv (社会主義患者集団) の略称。ハイデルベルグ大学内の総合診療所でセラピーグループを作っていた四〇人の患者が、ヴォルフガング・フーバーという医師とともに結成した団体。精神医学のイデオロギーや制度的・官僚主義的な抑圧を批判、大規模な闘争に発展して逮捕者も出た。患者が主体となって運動を展開した点で他の地域のそれとは一線を画している。
3. 本稿では「患者」と「病者」という言葉を併用している。前者はひとが医療において治療やケアを受けていて、そのことに文脈上の重要性がある場合に用いた。後者はそれにかぎらないより広い意味で用いた。ただし、厳密に切り分けられるものではなく、曖昧な場合もある。
4. Recherches 版では反精神医学運動への評論が精神分析批判と合わせて第三部「追い払う」にまとめられていた。
5. David Cooper, *Psychiatry and anti-psychiatry*, Routledge, 2013, p.29. (『反精神医学』、野口昌也・橋本雅雄訳、岩崎学術出版社、五〇頁。) この文章のすぐ後に「統合失調症者は存在しない」と続く。
6. R. D. Laing, *The divided self*, Quadrangle books, 1960, p.16. (『引き裂かれた自己』、阪本健二・志貴春彦・笠原嘉訳、みすず書房、十五頁。)
7. 「過程」、「実践」、「可知的」はサルトルの弁証法的理性を構成する重要概念。クーパーの著作でも使われている。

8. R. D. Laing, *The politics of experience and the bird of paradise*, Penguin books, 1990, p.100. (『経験の政治学』、笠原嘉・塚本嘉壽訳、みすず書房、一二八頁。)
9. Maud Mannoni, *Le psychiatre, son fou et la psychanalyse*, Seuil, 1970, p.10. (『反-精神医学と精神分析』、松本雅彦訳、人文書院、一一頁。)
10. David Cooper, op.cit., p.48. (前掲書、八〇頁。)
11. Ibid., p.48. (同書、八〇頁。)
12. cf., R. D. Laing, op.cit., P.106. (前掲書、一三六頁を参照。)
13. Ibid., pp.112-113. (同書、一四六頁。)
14. Ibid., p.110. (同書、一四二頁。)
15. Félix Guattari, *La révolution moleculaire*, Les prairies ordinaires, p.257. (『分子革命』、杉村昌昭訳、法政大学出版局、一九八八年、二一一頁。)
16. 精神薬理学にかんする擁護については『分子革命』のなかにも記述がある。cf., ibid., pp.457-458.
17. cf., Maud Mannoni, op.cit., pp.171-172. (前掲書、二〇八頁。)
18. cf., Sherry Turkle, *Psychoanalytic Politics*, 2nd edition, Free association books, 1992, pp.156-157.
19. ここでいう精神分析の影響とは、①「解釈」つまりある事柄が必ずそれ自身以外の別の事柄を意味しているということ、②「家族主義」つまりその別の事柄が家族的表象に還元可能であるということ、③「転移」つまり①と②の延長線上で患者の欲望が精神分析家の上に再設定されること、この三つのことを指している。cf., Félix Guattari, op.cit., pp.246-247 (前掲書、一九七-一九八頁を参照。)
20. Ibid., p.242. (同書、一九二頁。)
21. Ibid., p.253. (同書、二〇五頁。)
22. cf., R. D. Laing, "Metanoia, some experiences at Kingsley Hall,London", *Revue recherches*, no.8, pp.51-57.  
[http://www.editions-recherches.com/revue/extraits/extrait\\_08.pdf](http://www.editions-recherches.com/revue/extraits/extrait_08.pdf) (最終アクセス日 2022 年 12 月 26 日)

## 【論考】

# 東大入試現代文における「無意識の思想」とドゥルーズ哲学

## ～論理と〈像〉で読む東大現代文～第1回

伊藤 幸生

### 1. 東大現代文とドゥルーズ哲学

#### 1-1. 東大の現代文における「無意識の思想」

本稿は東京大学の入学試験における現代文の問題についてのひとつの試みを叙述しようというものである。東大入試の現代文の過去の問題を、その内容に着目して相互に関連づけながら読むとどう世界が見えてくるかを探求してみようと考えている。具体的には、東大入試の過去の現代文問題には「無意識の思想」として一体として捉えられるような一群の問題があり、これらの問題の内容を相互に参照しながら検討していく。たとえば2001年度第1問という問題がある。この問題の最後の設問は、どういふことをどうまとめて書けばよいのか見当がつかないような問題になっている。その際、それ以前に出題された1996年度第5問と、同じ年に出題された2001年度第4問に書かれた内容を手がかりとして読めばなにかが見えてくる、そうした試みを叙述してみたいと考えている。あるいは現在もっとも新しい問題である2022年度第4問もまた、過去の問題と関係づけることで多くのことが見えてくるという問題になっている。あたかもひとりの哲学者について、ある著書のある文言を、ほかの著書に現れた思想によって解釈することができるように、東大の現代文は問題が群れとしてひとつの思想をなしている。それは東大の出題者自身の思想とはまた異なったものであるかもしれないが、問題文を通じて無意識というありようについて受験生に考え、また感じてもらいたいという姿勢がうかがわれるという点においてはひとつの思想と言ってまちがいないと思う。

東大現代文における無意識の思想は実践につながっている、すなわち受験生が生きることにかかわってくる。無意識ということに思いをめぐらすことで、私たちにはどういふことができるのか。2008年度第4問は、舞台での役者の演技のあり方を問う問題であった。役者の演技のあり方を学ぶことが私たちの生活にどうかかわってくるのか。役者の演技について深く考えることが、一見関係のまったくなさそうな、「河川という空間の整備をいかに行うか」ということをテーマとする問題（2011年度第1問）と

つながっているというふうには東大の現代文は無意識の思想を構成していく。この2問は文章の題材も使用される言葉も概念も異なっているけれども、考えることにおいて同じ方向性をもつものとして読むことができる。

あらかじめお断りしておく、本稿ではさまざまな事柄を「無意識」というひとつの言葉で表している。精神分析的な意味、意識しないままで自分の中になにかが起きるというような状態、あるいは突然思いもかけない外的なショックを受けるという状況などである。たとえば2022年度第4問では、「意識の彼方からやって来るもの」という表現が二度でくる（武満徹「影絵（ワヤン・クリット）の鏡」、『樹の鏡、草原の鏡』所収、新潮社、1975年）。こうした表現も本稿では「無意識」という言葉に含めて考えている。

先に私は「一体として捉えられるような一群の問題」と書いたが、東大の現代文については、「死」というテーマをめぐる一連の問題を集中的に取り扱った書物がある。東大現代文に関しては、教養書として一般向けに書かれた紹介と解説の本がいくつか出版されているが、その中でも随一、出色の名著といえるのが、竹内康浩著『東大入試至高の国語「第二問」』（朝日新聞出版、2008年）である。その冒頭で取り上げられる、金子みすゞの詩の中でも広く知られている「雪」と「大漁」という二編の詩が出題された1985年度第2問（ただ、当時は金子みすゞはまだあまり知られていなかった）の解説だけでも読んでもらいたいと思う。東大現代文という大学入試問題の妙と竹内氏の読解の筋に驚嘆することと思う。また現在、東大の現代文の過去の問題については、桑原聡編著『東大の現代文 25 年[第 11 版]from1997to2021』（教学社、2022年）と『東大入試詳解 25 年現代文第 2 版 1995～2019』（駿台文庫、2020年）という2冊の本によって、1995年の問題にまでは遡って読むことができる。本稿では紙幅の都合で問題文全文を掲載することができなかつたため、ぜひこれら2冊の本で全文を参照しながらお読みいただきたいと思う。

## 1-2. 意識と無意識という問題の日常性と東大現代文

意識と無意識ということをめぐるのは、学問的な場面にとどまらず、日常の多くの事柄において多くの人が考えている。私たちは意識が行動の起点であると考えがちである。その一方では、スポーツでなぜ練習を重ねるのかと言えば、「意識しないでも」身体が反応するようになるためとの答えが返ってくるだろう（「ゾーンに入る」という言葉もよく言われる）。「一流の」銀行や証券会社の一部では新入社員が大きな恥を感じるような激しい研修を行うと言われていたことがあった。一度存分に恥を感じて、「あれだけの恥や厳しさを経験したのだ」という強い無意識が残っていれば、顧客相手に利益をあげようとするときなどに多少の強引な行動をするにも気後れしなくなるという意図であろうなどとも考えられる。いわゆる自己啓発などでは、「無意識を鍛える」ということも言われている。音楽がテーマの映画やドラマの多くでは、「誰かのために」と、無意識に思いがわき上がってきたようなときに素晴らしい歌や演奏になるという展開が見られる。こうした例で考えると、必ずしも意識ばかりでなく、無意識ということの働きや効用にも一般的な理解はあると言えるだろう。

さらにひとつ日常目にする例を挙げてみよう。ゼロ年代中頃から高校野球の優勝チームの選手たちは、優勝が決まった次の瞬間にはマウンド（ピッチャーの投げる場所）付近に集まり、全員で人差し指を空に向かって立て、挙げている。以前はマウンド近くでひたすらわきあがってくる喜びに身をまかせるかのように互いに身体を抱き合うなどして触れ合っていたのが（清原和博氏はそのときの記憶がないとどこかで言っているほどである）、現在の高校生たちは互いに触れ合いつつも、片方の手では人差し指を立てるポーズをつくっている。これは「意識」していないとできないポーズであろう。高校生としては最大限にまで、状況に無意識的に反応できるようになるよう身体を鍛え上げ、意識せずとも考えるべきことを考え、無心でプレーしてきた選手たちが、最後に見せるポーズは相当に意識的である。「喜びをどう表しても人の勝手」というレベルを超えて、意識と無意識のありようを考えるとということについての興味深い行動であると思う。今の時代の東大受験生たちは、そして東大現代文であれば、あるいはドゥルーズアンであれば、優勝決定の次の瞬間、ひたすら抱き合い触れ合うことと、片手では指を立てることのどちらを選ぶであろうか。

今、私が挙げたような事柄は、非常にとっつきやすい意識と無意識という問題についての例だろう。しかし東大の現代文では、スポーツのような分かりやすく、実感しやすい例はなく（「武道」ということが一度、並べられた例のひとつに挙げられていたこと

がある。2009年第1問、原研哉、『白』、中央公論新社、2008年）、また、「意識よりも無意識を働かせると様々な効用があるのである」というような一般的な書かれ方をした文章はない（先述の「意識の彼方からやって来るもの」という表現はかなりわかりやすい、例外的なものと言える）。こうした難しさがあるため、本稿ではドゥルーズの哲学を、東大現代文に分け入る手がかりとする。これは、東大現代文の内容とドゥルーズの哲学が問題とするところが同じであるという理由からであるが、こうした組み合わせは恣意的な取り合わせにすぎないと映るかもしれない。あるいはこうした「教養的な」読み方は、入試現代文を読む姿勢としてふさわしくないとされるかもしれない。しかしながらさらに言えば、東大現代文を、ドゥルーズ哲学をもって読む理由は、先に挙げた難しさに加えて、ひたすら、問題文の論理をその言葉で追っても、何らかの問題文外の導きがないと、その核に届かないような文章が選ばれているからという理由もある。本文中の言葉の連関を辿っていく「論理」という武器だけで向き合うにはあまりにも東大の現代文は手強い。あるいは、こうした「闘いの比喻」は適切ではないだろう。問題文を格闘の相手としてではなく、何かを考えるための、問題文の筆者とともに、そして東大の出題者とともに考えるための素材と思うことができる受験生であれば、「こういう問題を出す大学で本の読み方を教わってみたい」、という希望に満ちた学習を日頃からできるだろう。その読解の導き手として、思想的にはドゥルーズ哲学にまさるものは、少なくとも無意識という問題圏ではないといつてよいくらい、ドゥルーズは東大現代文に読む方向性を与えてくれる。

## 1-3. 東大のいう「体験の総体」と芦田宏直氏の〈像〉で読むということ

さらにもうひとつの理由は、受験生へのメッセージで、東大は、国語という科目の問題への取り組みについて、受験生に対して、「自己の体験総体を媒介に考えることを求めている」からである。東大は読み手（受験生）が自己の主観を完全に排して、ひたすら問題文中の言葉を論理的に詰めていくことで客観的に読むことのみをただ求めているのではないのではないかと、東大は自己の体験や、その体験をもとに考えていることと問題文に書かれていることとの距離を測りつつ、問題文に触発されながら考えることを求めているのではないかと、と思われるからである。そうであるならば、いわば私の体験の総体としてのドゥルーズ体験をもって東大現代文に臨むことは、東大現代文を読むことのひとつの可能性として認められるのではないだろうか。

では、こうした「体験の総体」について述べた東大の受験生に向けたメッセージを読んでみよう。東大の現代文を読んでいくう

えて重要な文章なので、全文を引用してみよう。強調は引用者によるものである(1)。

高等学校段階までの学習で身につけてほしいこと

東京大学を志望する皆さんには、アドミッション・ポリシーにも明示されているように、本学に入学するまでに、できるだけ多くのことを、できるだけ深く学んでほしいと思います。以下、本学を受験しようと考えている皆さんに向けて、高等学校段階までの学習において、特に留意してほしいことを教科別に掲げます。

#### 【国語】

国語の入試問題は、「自国の歴史や文化に深い理解を示す」人材の育成という東京大学の教育理念に基づいて、高等学校までに培った国語の総合力を測ることを目的とし、文系・理系を問わず、現代文・古文・漢文という三分野すべてから出題されます。本学の教育・研究のすべてにわたって国語の能力が基盤となっていることは言をまちませんが、特に古典を必須としているのは、日本文化の歴史的形成への自覚を促し、真の教養を涵養するには古典が不可欠であると考えからです。このような観点から、問題文は論旨明快でありつつ、滋味深い、品格ある文章を厳選しています。学生が高等学校までの学習によって習得したものを基盤にしつつ、それに留まらず、自己の体験総体を媒介に考えることを求めているからです。本学に入学しようとする皆さんは、総合的な国語力を養うよう心掛けてください。

総合的な国語力の中心となるのは

- 1) 文章を筋道立てて読みとる読解力
  - 2) それを正しく明確な日本語によって表す表現力
- の二つであり、出題に当たっては、基本的な知識の習得は要求するものの、それは高等学校までの教育課程の範囲を出るものではなく、むしろ、それ以上に、自らの体験に基づいた主体的な国語の運用能力を重視します。

そのため、設問への解答は原則としてすべて記述式となっています。さらに、ある程度の長文によってまとめる能力を問う問題を必ず設けているのも、選択式の設問では測りがたい、国語による豊かな表現力を備えていることを期待するためです。

1) 文章を筋道立てて読みとる読解力、2) それを正しく明確な日本語によって表す表現力、つまり、問題文の言葉の論理を正確に辿り、その上で、問われている内容に関して的確な表現をする。このふたつの事柄については、国語の学習や受験指導においてまさに基本とされるべきことであろう。本稿ももちろん、問題文そ

のものの論理を言葉で辿る。しかし東大はこれらに加えて通常の、特に受験国語の世界にとっては意表を突かれるようなことを要請している。「自己の体験総体を媒介に考えることを求めている」、「自らの体験に基づいた主体的な国語の運用能力を重視」という具合に、二度も「体験」という言葉を国語学習の中に重要なものとして位置づけているのである。

現在の大学受験の現代文指導は、高校や予備校の現場では様々なありようで行われているかもしれないが、参考書のレベルで見れば、ほぼすべてのものが、「自分の主観を排して、問題文の言葉を論理的に読み、筆者の主張を正確に読み取る」ことに主眼が置かれている。「論理的に読む」とは、例えば評論文であれば、筆者の問題提起と筆者のとる立場を正確に押さえて、その理由や根拠となる言葉を捉えていくことや、反対の立場と筆者の立場との二項対立的構造を踏まえて、問題文の言葉がどの立場のものかを対比的に捉えることなどに留意して読み進めることであるなどと言われる。ここまでは、まさに東大のいう「総合的な国語力」の一番目の、文章を筋道立てて読みとる読解力の要請に沿うものである。その際、受験指導参考書では、筆者の主張を正確に捉えるためにはなによりも「自分がどう思うか、考えるかなどの主観を排すること」が強調される。ここにおいて、「自己の体験」を強調する東大のメッセージは、どのような意味をもつのであろうか。それは文章の読解に「自分の主観を持ち込む」もの、読解における誤解を呼ぶ危険なものではないのだろうか。

東大が「自己の体験」をもとに考えることをいかに重視しているかは、「外国学校卒業学生特別選考小論文問題（第1種）」に現れている。文科三類における同選考問題では、2019年には、「謙虚さは美德であるという価値観について、あなたの考えを述べなさい」、また「現代社会では人間の持つ多様性を尊重することが求められるようになってきている。多様性にはさまざまな側面があるが、その中から一つを取り上げ、これについて論じなさい」、という出題がなされている。その際、「できるだけ自分の国の事例や自身の経験を交えて論じること」が両問題において求められた。さらに2020年には、「私たちは「ことば」を使う存在だといわれる。「ことば」とはどのようなものといえるか。自分の経験をもとにして論じなさい」という出題がなされた。これらは小論文問題であり、与えられたテーマについて自分で思考の枠組みをつくるのが求められ、その枠組みを支えるものが自己の体験である。

では、東大現代文を「読む」ときに、「自己の体験」をもって臨むことの具体的な意味は何であらうか。体験ということは、実際の生活での感覚、知覚、感性、知性、想像力、身体各部の動きなどをはじめ、人間の総体的なありようをいうものであろう。「現

代文にセンスは必要か」という古くからの問いがある。東大の立場からすれば「必要である」と答えることになるだろう。では、「自己の体験」をもって文章に臨めば何を得られるのだろうか。それはひとつの「像」ではないだろうか。そして文章の「像」をもって読むことが東大現代文を読むということなのではないだろうか。

哲学者の芦田宏直氏はつぎのように述べている。

二十年ほど前、誰かがこういうことを言っていました。書物には、著者の〈入射角〉〈出射角〉があると。彼は著作の動機を〈入射角〉、解決場所を〈出射角〉と呼んだわけです。私の言葉で、その意味でもう一つ突っ込んで言うと、それは書物の〈像〉というようなものです。読み込んでいくと書物が継起的な言葉の羅列から離れて著者の〈像〉や書物の意味の〈像〉のように見えてくる瞬間がある。その〈像〉から自然と逆照射されるいくつかの言葉やフレーズがある。それが〈入射角〉や〈出射角〉の言葉です。それは論理的な演繹で迎えられるものではない。書物の全体とは、言葉の全体ではなくて、〈像〉の全体性なのです。(『努力する人間になってはいけない 学校と仕事と社会の新人論』、ロゼッタストーン、2013年、88頁。強調は引用者)

まさに東大現代文には、「論理的な演繹で迎えられるものではない」ものがある。そういった文章が選ばれている。「意識と無意識」という問題を考えるときにも、スポーツなどの直感的に分かるような題材は選ばれず、また、「意識よりも無意識的な側面を重視することからこそ生まれるものがある」というような一般的な命題は提示されない。一見して意識や無意識というものが前面に現れないことも多く、言葉としては現れないこともある。文章を論理的に整序していく、しかしそれだけでは文章の核に届き切らないものがある。「言葉の全体」を論理的に辿っても文章の核を捉えきれない、論理に加えて、「体験の総体」をもって考える姿勢がなければ読むことができない、そこで「体験の総体」をもってすると浮かび上がってくるものが、芦田氏の言う〈像〉ではなかろうか。〈像〉を浮かび上がらせるものは、各の読む者でしかない。それはその者の「体験の総体」によるというほかないのではないだろうか。

そこで先述のように、東大現代文の〈像〉をつかむためにドゥルーズ哲学を大きな手掛かりとする。さらに本稿では冒頭でも触れたように、東大現代文の中から「無意識の思想」としてまとめられた一群の問題に書かれた具体的な内容を相互に参照しつつ読む。東大のある年度の問題に書かれた内容を、別の年度のある

問題の読解の導き手とする。こうした問題の具体的な例をいくつか示したいと思う。

東大は現代文の「高等学校段階までの学習」ということを強調し、大学入学までに知っておきたい考え方や感じ方という観点から問題文が選ばれているようである。目立つところでは、環境問題についての基本的な観点(2000年度第1問、2004年度第1問、2012年度第1問)、都会の時間とはちがった田舎の時間の感覚(1995年度第5問、2009年度第4問)などをはじめ、ほかにも芸術に関する基本的な考え方なども多い。2001年度第4問の本文には、「われわれの文学的な言葉が抱え込む共通の価値を一言でいえというなら、それは「孤独」である」という一文がある(岡部隆志『言葉の重力—短歌の言葉論』洋々社、1999年)。文学というものについては、それが「孤独」ということに関わるものだということを経験しておいてほしいという問題文を通じたメッセージではないだろうか。そして後にみるように、事実この考え方や感覚をもってすれば読む方向性が見えてくる問題を東大は出題している。

では、ドゥルーズと、別の過去の問題の内容を手掛かりとして東大現代文を読む、このことの一例を見てみよう。

なお、本稿の以下の構成とその趣旨は以下のようになっている。3以下については、本連載第2回以降で展開する予定である。

2. 2008年度第4問 ドゥルーズと別の東大の問題を手掛かりとして読む具体的な例
3. 1996年度第5問と2020年度第4問 24年の時を同じく同じひとつのことが語られたふたつの問題 東大現代文における「無意識、非個人性、非日常性」という思想を取り出す
4. 2001年度第4問 別の東大の問題を導きとして、作家の孤独と無意識を読み取る
5. ドゥルーズ哲学における「意識と無意識、非個人性、非日常性」についての概観
6. 2022年度第4問 過去の問題の集大成のような問題

## 2. 2008年度第4問を読む 舞台での役者と感情の昂まりの表現

### 2-1. 演劇についての〈像〉

ドゥルーズ哲学と東大現代文の過去の別の問題を手掛かりに問題文を読む具体的な例として、2008年度第4問を取り上げてみよう。竹内敏晴『思想する「からだ」』(晶文社、2001年)からの出題である。演劇において感情の昂まりを表現をするために役者はどのように演じるべきかを論じた文章である。意識と無意識という事柄について、きわめて実践的な内容になっている。意識を働かせようとするのか、無意識の未知の動きに賭けてみるの

か、これによって出てくる結果が異なってくるのである。このことが滋味深く書かれていく。本問は文章構造の論理的演繹だけで読み切ることが難しい。読み進めていく際に、その書名に「実践的」pratique の語をもつ『スピノザ実践の哲学』の思想の助けを得れば、芦田氏のいう文章の「〈像〉の全体性」を得て、その核心にたどり着くことができるということを見ていきたいと思う。

生の演劇を見たことのある高校生はさほど多くはないであろう。海外の超一流というレベルとなるとほとんどいないと思われる。本問も実際に観劇体験が豊富な受験生を想定して作られたとは考えられない。映像での舞台体験や映画やテレビドラマでの俳優の演技とのアナロジーで演劇について考えることはできるとしても、舞台演劇についてあらかじめどのような〈像〉を持っているかで読む方向性が変わっていくだろう。たとえば演劇について、①役者がある状況での役柄の人格や様々な感情などを演じ、表現することが演劇である、という像があるだろう。しかし、本問の内容により迫ることのできる演劇〈像〉は、②演劇とは、いかに日常を扱っていたとしても、役者や装置、照明が織りなす、日常とは別の、あるいは日常を超えるような力と力とが行き交う空間世界を（時間の経過とともに）創り上げるものである、というような「力にあふれた空間の創造」というものであろうと思われる。

この②の像について、別の東大現代文の過去の問題からこのことを考えてみたい。ひとつめは1999年度第5問、歌人の土屋文明について書かれた文章である（柳澤桂子『生と死を創るもの』）。そこでは、「生活を詠うといっても、単に日常の雑事を歌にすればいいというのではない。「他人の心に深く訴える」ようなものでなければならぬ。人間の生理、心理とはかけ離れたところから出発して、なおかつ感動をあたえようというのである」と言われる。もうひとつは、本問よりも後に出題されたものとなるが2010年度第4問、小野十三郎「想像力」からである。「……もし詩人が自ら体験し、生活してきた事からだけ感動をひきだし、それを言葉に移すことに終始していたならば、詩人なんてものは、人間にとって、あってもなくても一向にさしつかえのないつまらないものになるだろう。詩が私たちに必要なのは、そこに詩人の想像力というものがあるからであって、それが無いと、謂うところの実感をも普遍的なものにすることはできない」と書かれる。このふたつの引用は芸術の基本的な考え方について、まさに「高等学校段階までに」知っておくべきような事柄だろう。短歌や詩というものは、日常をそのまま歌っても作品にはならない。なんらかの、たとえば想像力による加工というようなプロセスがなければ、人に訴えるようなものにはならない。

しかしここで一度立ち止まってみなければならない。これらふ

たつの引用文は「短歌」と「詩」についてのものだ。これを「演劇」に関する文章に適用してよいのだろうか。これは法の適用にも似た問題である。問題は、しばしば指摘される、国語、現代文における「本文を自分の知っていることや考えに引っ張り込んで読む危険」を避けることである。具体的にこの適用という問題を考えてみよう。日本国憲法第24条は、「婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し」とある。では、同条の文言では「両性」となっているところ、同性婚はこの第24条によって保障される権利としてあるのだろうか（国家の最高法規によって認められる意義は大きい）。このときに、「この両性という文言は同性間の恋愛や婚姻ということの認知度が低かった時代を背景としたものであり、憲法の趣旨は同性間の婚姻を禁止するものではない」と解釈すれば、同性婚の権利は憲法で保障される重要なものとなりうる。また、両性間であっても同性間であっても、同性婚のみを禁止するほどの差異は実質的に婚姻というものの実体にはないという判断があれば、法の適用は拡張されうる。

では、短歌や詩と演劇についてはどうか。日常そのままを演じる素人演劇を思い浮かべてみれば、演劇においてもやはり、加工プロセスのない、日常そのままのものは作品とは言えないだろう。そうであれば、やはり日常を超えた何かが演劇になければならない。東大現代文においては、こうしてある過去の問題が別の問題を読むときのヒントになることがある。そのときに重要なのは「法解釈による法適用」といえるような姿勢である。ヒントになりそうだが、本当にそうなのかを実質的に考えて判断しなければならない。このことは自己の体験や考え方であってもそうであろう。書かれていることと自己の体験や考え方とはどこが同じでどこが異なっているのか、両者の距離を測りつつこれを吟味することで自分の体験に問題文を引っ張り込む危険は避けられる。

本問に戻ろう。2008年度第4問を読むためのひとつの必要と思われる〈像〉は、舞台とは場の力が高まっていき、力が行き交うようになる空間であるというものであった。本問は先述のように舞台での感情の昂まりが生まれるためには役者はいかに演じるべきかを論じるものであるところ、「感情の昂まり」のみならず、舞台そのものを、力の高まりという像で捉えることが本文全体の〈像〉に迫る鍵になるのである。

では、次に本文の展開を見てみよう。

## 2-2. 本文の展開 三種類の女優たち 特に泣く女優のなにかだめなのか

本文の展開は、三種類の女優たちとともにある。順番に見ていこう。

I. 「二流の役者がセリフに取り組むと、ほとんど必ず、まずその

セリフを吐かせている感情の状態を推測し、その感情を自分の中にかき立て、それに浸ろうと努力する」。例えば「嬉しい」というセリフがあれば、嬉しい気持ちになろうとする。その際、女優たちは、「どうもうまく『嬉しい』って気持ちになれないんです」といった言い方をすることになる（チェーホフの『三人姉妹』の末娘イリーナの第一幕の長いセリフの中に「なんだってあたし、今日こんなに嬉しいんでしょう？」（神西清訳）という言葉が例にとられている）。

Ⅱ. さらに、それ以下の役者は、感情の状態を推測し、浸ろうともせず、ただ感情を表面的な身振りで演じようとのみする。たとえば、いかにも「嬉しい」というセリフに合う身振りで演じようとする。女優は、「まず「ウレシソウ」に振舞うというジェスチュアに跳びかかる」のである。

ここで竹内氏は、「感情とはなにか、そのことばを言いたくなった事態にどう対応したらいいのか」と問題をたてる。そして、最終段落に「感情の昂まりが舞台上で生まれるには「感情そのもの」を演じることを捨てねばならぬ、ということであり……」とあることから、舞台上「感情の昂まり」の表現を生み出すために、役者はいかに演じるべきなのかがテーマであることが分かる。

Ⅲ. そして、さらに第三の女優が登場する。このタイプの役者は悲しみの表現をする際に実際に涙を流す演技をしてみせる。涙を流したいときに涙を流すことは演技とはいえ驚くべきことである旨を一旦、竹内氏は書く。しかし続けて次のように書く。

数年演出助手として修業しているうちにどうも変だな、と思えてくる。実に見事に華々しく泣いて見せて、主演女優自身もいい気持ちで楽屋に帰ってくる——「よかったよ」とだれかれから誉めことばが降ってくるのを期待して浮き浮きとはずんだ足取りで入ってくるのだが、共演している連中はシラツとして自分の化粧台に向っているばかり。シーンとした楽屋に場ちがいな女優の笑い声ばかりが空々しく響く、といった例は稀ではないのだ。「なんでえ、ウ自分ひとりでいい気持ちになりやがって。芝居にもなんにもなりやしねえ」というのがワキ役の捨てゼリフである。

東大の設問は、下線部ウ、「自分ひとりでいい気持ちになりやがって。芝居にもなんにもなりやしねえ」とはどういうことかを説明せよ、というものである。このワキ役のセリフの解釈が問われている。どう考えるべきか、続く段落を見てみよう。

実のところ、ほんとに涙を流すということは、素人が考えるほど難しいことでもなんでもない。主人公が涙を流すような局

面まで追いつめられてゆくまでには、当然いくつもの行為のもつれと発展があり、それを役者が「からだ」全体で行動し通過してくるわけだから、リズムも呼吸も昂っている。その頂点で役者がふっと主人公の状況から自分を切り離して、自分自身がかつて経験した「悲しかった」事件を思いおこし、その回想なり連想に身を浸して、「ああ、なんて私は哀しい身の上なんだろう」とわれとわが身をいとおしんでしまえば、ほろほると涙が湧いてくるのだ。つまりその瞬間には役者は主人公の行動と展開とは無縁の位置に立って、わが身あわれさに浸っているわけである。このすりかえは舞台上で向いあっている相手には瞬間に響く。「自分ひとりでいい気になりやがって」となる所以である。

この箇所を素直に読めば次のようになるだろう。「役者は役柄に成りきるのが仕事である。にもかかわらず、この女優は役の人柄や状況を演じるのではなく、自分の個人的な状況における経験を役柄に置き換えている。そしてその経験での悲しみの感情に浸り、外形的に涙を流し、深い感情を表現しているという迫真さにひとりで酔うことによって（「＝自分ひとりでいい気になりやがって」の意味）芝居を壊している（＝「芝居にもなんにもなりやしねえ」の意味）。しかし、この解答の方向性には何かが欠けている。これは先述の、演劇の目的は役者が役柄の感情などをうまく演じることだと捉える演劇〈像〉①だけによる読み方である。特に問題は、「芝居にもなんにもなりやしねえ」という文言の解釈、「芝居になっていない」とはどういうことかである。「芝居を壊している」などの言い換えは解答としては曖昧である。文章全体の趣旨が「舞台上での感情の昂まりをいかに表現するか」というものであることを踏まえて、このテーマにいかに近づくかということ解答の方針にしなければならない。ここで「舞台＝力の行き交う空間」という演劇〈像〉②を思い出してみよう。あるいはここでドゥルーズの教えを思い出してみよう。この箇所を読んで、次のようなドゥルーズ（と『ディアログ』共著者のクレール・パルネ、以下、共著の場合は、ドゥルーズ＝パルネのように表記する）の言葉を思い出さないであろうか。

書くこと *ecrire* はそれ自身のうちに自らの目的をもっていない。それはひとえに生が個人的な何かではないからである。あるいは、エクリチュールの目的とは生を非個人的な力能の状態に運んでいくことである。（D61/88～89）

グレゴリー・ベイトソンは「プラトー」という語をきわめて特殊なものを指すのに用いている。すなわち、さまざまな強度

の連続する地帯、みずからの上に打ち震え、何かある頂点へ、あるいは外在的目標に向かうあらゆる方向づけを回避しつつ展開される地帯である。ベイトソンが実例として引いているのはバリ島文化であり、そこでは母子間の性的な戯れ、あるいは男同士の喧嘩のあの奇妙な強度の膠着状態を経由する。  
(MP32/上 53)

ドゥルーズが私たちに教えてくれるのは、個人的なものを超えたレベル、強度の連続体などという考え方、感じ方である。各について、ドゥルーズの言葉を本論にどこまで適用できるものかを、先ほどの法解釈的なプロセスのように検討してみよう。この「非個人性」は、英米文学についての文脈での「書くこと」についてであり、「演劇」とは直接の関係はない。しかし、文学と演劇という一種の類比は、ともに表現活動だという点からできる。必要なことはこの文学と演劇との距離を図って問題文をドゥルーズに引っ張り込まないように読むことだ。「エクリチュールの目的とは生を非個人的な力能の状態に運んでいくこと」という言葉は、文学あるいは書くという創造行為は日常的な個人性を超えた次元に向かうということを言っている。創造行為という点では、文学と演劇を区別する特別の必要はない。あるいは直感的に、私たちは日常を超えた見えない力の世界を求めて様々な創造活動をしているということをもドゥルーズ＝バルネの言葉は端的に教える。そうであるならば、たとえば役者や観客という個人の生を非個人的な力能の状態に運んでいくことも演劇の目的となるだろう。あるいは舞台そのものを非個人的な力能に満ちた世界にすることが目的となるだろう。そう考えると、役者が自分「個人」の感情や経験を芝居に入り込ませるなどは原則として批判されるべきことになる。

では、問題文中のどの文言に着目すればよいのだろうか。それを見つけるために、さらに「強度の連続体」という言葉を考えてみよう。ここでもまた、『千のプラトー』からのドゥルーズ＝ガタリの引用文は、「演劇」を扱った問題文と直接関係するわけではない。やはり問題はドゥルーズ＝ガタリのいう強度の連続体という概念で問題文をどこまで読むことができるかという、ドゥルーズと問題文の距離を測ることにある。一番の相違点は、問題文とは異なり、ドゥルーズ＝ガタリがベイトソンから引く「強度の連続体」は何らかの頂点を目指す高まりではないことである。問題文の文脈は、「感情の昂まりが舞台で生まれるには」ということの考察過程の中にあり、これは「頂点を目指す運動」に関わるといえるだろう。さらに「リズムも呼吸も昂っている。その頂点で役者がふっと主人公の状況から自分を切り離して」とあるように次第に昂っていく状況が問題となっている。またベイトソンは

バリ島という実例を挙げているが、バリ島のありようと舞台ともまた違うものであり、舞台というものが想定されているのかも分からない(ただ演劇については、ドゥルーズにとってアントナン・アルトーという例があり、このことは舞台＝強度空間という方向性を根拠づける)。しかし具体的な例としてのバリ島のありようで言われているのは、「母子間の性的な戯れ、あるいは男同士の喧嘩のあの奇妙な強度の膠着状態」である。人と人との接触におけるある状態が強度の状態例として言われている。演劇もまさに人と人との接触による創造である。そうであるならば、「強度」ということを舞台に求めることができるだろう。あるいはドゥルーズ＝ガタリの言葉から、芸術的創造行為＝強度的なありようの創造、ということをも端的に直感することもできるだろう。

泣く女優は、「主人公が涙を流すような局面まで追いつめられてゆくまでには、当然いくつもの行為のもつれと発展があり、それを役者が「からだ」全体で行動し通過してくるわけだから、リズムも呼吸も昂っている」という状態まで行ったのである。そのまま「からだ」全体で行動し続ければよかったのだ。しかしそこで彼女は自分のかつての感情に訴えてしまった。そうすると、彼女は、役柄を全身で演じきらなかったために、また非個人性に徹することができなかったために、強度を頂点にまで登りつめることができなかった、すなわち、感情の昂まりを行くべきところまで表現しきれなかったものであり、これこそが「芝居にもなんにもなりやしねえ」の意味だということになるだろう。その後の第8段落に「テンションもストンと落ちてしまう」というふうにテンションという語があり、また、先に触れた最終段落での「感情の昂まりが舞台で生まれるには……」という本文の最終目標を表す表現などから、「芝居にならない」ということの要点は、①役柄そのものを演じ切っていないということと、②全身で最後まで演じ切らないことにより、テンションが下がり、昂まりをその頂点に至るまで表現できなかったということになるだろう。「自分ひとりでもいい気になりやがって」という文言については、これまで述べてきたような、「自分の体験に訴えて、悲しい感情に浸っている様子」と解しておくといえよう。解答としては、「役者が感情に浸ろうとして、自らの個人的体験を想起して役柄を離れたために、役柄を全身で演じ切ることで生まれる感情の昂まりが表現されなくなった」という趣旨のことを書けばよいのではないだろうか。あるいは、下線部が、詰まるところ、「芝居になるか、ならないか」という、演劇の本質的なことを問題にしていると捉えれば、「演劇とは、役者が個人的な体験による感情を入れず、役柄を全身で演じ切ることにより生まれる感情の昂まりを表現する芸術である」という趣旨のことを書けばよいのかもしれないが、これは行き過ぎた解答であるかもしれない。

### 2-3. 三種類の女優たちはどのような批判されるべき「概念」と関係しているのか

続いて、竹内氏は本来「悲しい」とはどういうことかという考察に移る。悲しいとは、ある人にとってなくてはならない存在が失われたとき、そんな現実を取り捨てたい、「消えてなくなれ」という「身動き」ではないかという。だが現実是不変である。「それに気づいた一層の苦しみがさらに激しい身動きを生む。だから「悲しみ」は「怒り」ときわめて身振りも意識も似ているのだろう。いや、もともと一つのものであるかも知れぬ」と、まず、激しく、悲しみと怒りとが不分明なほどの身動きがあるとされる。ここでは「意識」は悲しみとも怒りとも意識されてくるような明瞭ではないものとして後景に退いていると言えるだろう。

それがくり返されるうちに、現実には動かない、と少しずつ「からだ」が受け入れていく。そのプロセスが「悲しみ」と「怒り」の分岐点なのではあるまいか。だから、受身になり現実を否定する闘いを少しずつ捨て始める時に、もっとも激しく「悲しみ」は意識されて来る。

とすれば、本来たとえば悲劇の頂点で役者のやるべきことは、現実に対する全身での闘いであって、ほとんど「怒り」と等しい。「悲しみ」を意識する余裕などないはずである。ところが二流の役者ほど「悲しい」情緒を自分で十分に味わいたがる。だからすりかえも起こすし、テンションもストンと落ちてしまうことになる。「悲しい」という感情をしみじみ満足するまで味わいたいならば、たとえば「あれは三年前……」という状態に身を置けばよい。

こういう観察を重ねて見えてくることは、感情の昂まりが舞台上で生まれるには工「感情そのもの」を演じることを捨てねばならぬ、ということであり、本源的な感情とは、激烈に行動している「からだ」の中を満ち溢れているなにかを、外から心理学的に名づけて言うもの、ということである。それは私のことばで言えば「からだの動き」=action そのものにほかならない。ふつう感情と呼ばれていることは、これと比べればかなり低まった次元の意識状態だということになる。

東大の設問は、下線部工、「感情そのもの」を演じることを捨てねばならぬ」とはどういうことかを説明せよというものである。この文言の解釈が問われている。具体的には三種類の女優たちがやってみせたように演じてはならない、ということになるが、では詰まるところ、どういうことなのだろうか。どう表現するべきだろうか。

これまでの〈像〉をもとにこの箇所を読むと、どのような〈像〉が浮かびあがってくるだろうか。この三つの段落からひとつの「二項対立」を取り出してみよう。具体的には、女優たち VS 竹内氏ということになるが、これを概念で置き換えるとどうなるであろうか。二項対立の一方である竹内氏の立場はすぐに気づくだろう。「本来たとえば悲劇の頂点で役者のやるべきことは、現実に対する全身での闘い」であるという表現、また最終段落での結論部分で、「本源的な感情とは、激烈に行動している〈からだ〉の中を満ち溢れているなにかを、外から心理学的に名づけて言うもの、ということである。それは私のことばで言えば「からだの動き」=action そのもの」であるとされていることから、竹内氏にとって〈からだ〉、全身での動きということが演技における核心であることがわかる。すでに第1段落において、ジェスチュアで演じようとする女優を批判するときに、「嬉しい」とは、主人公が自分の状態を表現するために探し求めて、取りあえず選び出して来たことばである。その〈からだ〉のプロセス、選び出されてきた〈ことば〉の内実に身を置くよりも、まず「ウレシソウ」に振舞うというジェスチュアに跳びかかるわけである。」と述べられていた。そこで言われている、主人公の「自分の状態」、「〈からだ〉のプロセス」というような事柄が最後に展開されたものが、「全身での闘い」、「〈からだの動き〉=action そのもの」である。

では、この「からだの動き」=action そのものという概念と二項対立構造をなすもう一方の概念は何であろうか。具体的な存在者としては女優たちである。これまで批判されてきた三種類の女優たちを振り返ってみよう。まず、①役柄にそのセリフを言わせている感情の状態を推測して浸ろうとする女優。次に、②セリフに現れた感情（たとえば「嬉しい」）の内実を推測することさえせずに、その感情に見合った典型的な身振りを想定して演じる女優。最後に、③役柄の感情を、個人的に体験した感情にすり替えて表現しようとする泣く女優である。これらの女優たちに共通することは何であろうか。それは自分が主体的、能動的な立場で感情を描き出せると考えていることだ。批判されているのは、「演じよう、演じよう」とする態度である。主体的に演技の内実を構成しようという姿勢である。この〈像〉を前提に文章の後半部分に戻ろう。

「二流の役者ほど「悲しい」情緒を自分で十分に味わいたがる。だからすりかえも起こすし、テンションもストンと落ちてしまうことになる」と女優たちはあらためて批判されている。そして、東大の設問は、感情の昂まりが舞台上で生まれるには、「感情そのもの」を演じることを捨てねばならぬ」とはどういうことかを説明することである。このことを肯定的な表現で述べれば詰まるところ、「からだの動きそのもので演じればよい」という趣旨のもの

となるだろう。では否定的な面から記述すれば、どのような言葉（概念）がよいのだろうか。繰り返せば、「からだの動き」= action そのものと二項対立をなす問題文での言葉（概念）は何だろうか。竹内氏の文章は走り、「○○はだめで、全身で演じることが大事なのだ」というような一般的な立ち止まった表現は見られないというところに難しさがある。

ここでドゥルーズのいくつかの言葉を思い浮かべてみると、一挙に直感的な文章の全体的理解、言いかえると、「文章の像の全体性」に至ることができる。竹内氏の文章について、感覚的な〈像〉としても思想的な〈像〉としても全体的な〈像〉を形成することができるはずだ。芦田宏直氏が書いていた「書物の全体とは、言葉の全体ではなくて、〈像〉の全体性」であるということ、本問において見出せることになる。このことが、また問題文中にある解答に必要な言葉に結びついていくはずである。

「意識が身体をコントロールする」という思想、この思想に対する違和感がドゥルーズの出発点である。

私たちは意識やそれがくだす決定について、意志やそれがもたらす結果については無数の議論を重ねながら—その実、身体が何をなしうるかは知りもしない……ニーチェも言うように、ひとは意識を前にして驚嘆しているが、「身体こそ、それよりはるかに驚くべきものなのだ……」（SPP28/33）

スピノザはたえず身体に驚く。彼は身体を持っていることに驚くのではなく、身体がなしうることに驚くのだ。（D74/104）

『スピノザ実践の哲学』の第1章でスピノザの生涯と思想が概観された後の第2章でドゥルーズが真っ先に問題としたのが、「スピノザによる意識の評価の切り下げ」であった。何が問題か、それは、私たちが意識や意志によって行動を起こすと考えていることだ。しかし、意識や意志などというものはどのようなレベルのものなのか。

身体は私たちがそれについてもつ認識を超えており、同時に思惟もまた私たちがそれについてもつ意識を超えている。自らの意識の所与の制約を超えた身体の力能をつかむことが私たちにもできるよくなるよくなるとすれば、同じひとつの運動によって、私たちは自らの意識の所与の制約を超えた精神の力能をつかむことができるよくなるだろう。（SPP29/34~35、以下、傍点による強調はすべて引用者による。）

意識とは何よりも「制約」という問題なのだ。「同じひとつの運動

によって」という表現は、「観念の秩序および連結は物の秩序および連結と同一である」といういわゆる心身並行論によるものであろう。あるひとつの運動において身体が能動的であれば、精神も能動的である。並行論は身体と精神のいずれかに優位があるとするものではなく、ここで身体が意識を超えるということは、身体の優位を言うものではなく、身体と精神がともに意識を超えることが問題であるということだ（SPP28~29/34）。そして、次のように述べられるにいたる。

身体というモデルが意識を超えるということを示すことは、思考に対する意識の価値を切り下げる。身体のもつ未知の部分と同じくらい深い思惟のもつ無意識の部分が、ここに発見される。（SPP29/35）

私たちは、自らの身体に「起こること」、自らの心に起こることしか、言いかえれば、他のなんらかの体がこの私たちの身体の上に、なんらかの観念がこの私たちの観念の上に引き起こす結果しか手にすることができないような境遇に置かれている。（SPP30/36）

……私たちが自らの認識や意識の所与の秩序にとどまっている限り、なに一つわからない。要するに、そのままでは私たちは、物事の認識においても自身の意識においても本来の原因から切り離された結果しか、非十全な、断片的で混乱した観念しかもてないようになっている。（SPP30/37）

「無意識」という言葉が登場する。これは、「身体」と同じく、未知の広大な領域をもつものとして、制約ということと不可分の意識とは異なったレベルのものとして見出されたのである。同書の第4章「エチカ主要概念集」における「意識」の項でドゥルーズは、意識について、「観念のもつ、無限に分化し、二重化してゆく特質」、すなわち「観念の観念」であるという（SPP82/85）。これが意味することは、ひとつの出来事によって身体変状と精神におけるその身体変状の観念が生じるとき、意識は、「観念の観念」としてこれらに遅れているということであろう。意識は本質的に遅れている。意識は、結果を手にするということがその本質であり、しかも「本来の原因から切り離された結果しか、非十全な、断片的で混乱した観念しかもてない」のであり、意識について、原則として、行動を指令し、開始させるものとしては考えることはできないのである。意識はたとえば、「欲望とは意識を伴った衝動である」（『エチカ』第3部定理9備考）、「善および悪の認識は、我々に意識された限りにおける喜びあるいは悲しみの感情に

ほかならない) (『エチカ』第4部定理8) などのように、衝動や感情が生じた後に生まれてくることの方がえる。

ここでさらに私たちに『エチカ』に即して、感情と意識ということを考えてみよう。「我々は身体の変状の観念をもつ」(『エチカ』第2部定理13証明)と、第3部定義3において感情(羅 affectus、仏 affect)は、「我々の身体の活動能力を増大しあるいは減少し、促進し、あるいは阻害する身体の変状、また同時にそうした変状の観念である」と定義されている。そうすると、身体変状とその観念とが同時に生まれるときに、感情もまた身体変状の観念として生まれることになる。そして、「人間精神は、身体の変状のみならずこの変状の観念をも知覚する」(同書第2部定理22、その証明では、「変状の観念の観念」といわれる)のであり、これはドゥルーズが意識について言う「観念の観念」ということになるだろう。すなわち、意識は感情に時間的にも論理的にも遅れていると、あるいは少なくとも先んじることはないと言えるだろう。(※なお、ドゥルーズの観念と感情(affect)についての議論は複雑である。『スピノザ実践の哲学』の第4章「エチカ主要概念集」における「変様」、また1978年1月24日のスピノザに関する講義を参照(2)。

こうしてドゥルーズによって私たちは無意識と意識ということについての考え方の方向性を与えられた。意識というものは、生きるということの中では、感情の発生に後れている。なんらかの出来事に後れている。私たちは意識をもって行動の端緒と考えたり、意識によってなにかをコントロールしたりしようと考えがちであるが、これは疑わしいことだ、と。こうしたことを踏まえれば、竹内氏の文章はどのように読めるのか。〈像〉の全体性が見えてはこないだろうか。

竹内氏は、「本来「悲しい」ということは、どういう存在のあり方であり、人間的行動であるのだろうか」と、演劇を一旦離れてひとが実際に生きる場面から考察を行っていた。ひとが「悲しみ」を生きる場面では、激しく、悲しみと怒りとが不分明なほどの身動きがある一方で、「意識」は悲しみを意識しているとも、怒りを意識していると言えるような明瞭ではないものとして背景に退いていたのであった。そして、「受身になり現実を否定する闘いを少しずつ捨て始める時に、もっとも激しく「悲しみ」は意識されて来る」のであった。そのうえで役者の演技について、「本来たとえば悲劇の頂点で役者のやるべきことは、現実に対する全身での闘いであって、ほとんど「怒り」と等しい。「悲しみ」を意識する余裕などないはずである」と考察はつながっていた。ここまでくれば、何が問題かを直観することも難しくないかもしれない。しかし、まちがいがなく問題を捉えるためにドゥルーズを思い出そう。意識というものは本質的に遅れたものだということを思い出

しさえすれば、竹内氏の問題化の流れにおいて、「意識は身動きに遅れている」、「意識は全身での演技による感情の発生に遅れている」ということが核心だとたしかに捉えることができる。上記の引用では、「悲しい」という過程が煮詰まっていったときに悲しみはもっとも激しく「意識されてくる」、また悲劇の頂点で悲しみを「意識する余裕などないはず」などの文言が鮮烈に浮き上がってくるのではないだろうか。まさに「意識は遅れている」ということの表現となって浮かび上がるのではないだろうか。そして女優たちはなにをしようとしていたのか、という〈像〉が明確になってくるのではないだろうか。

生きるときにはまず事態に対する身動きがあるのならば、そして感情が生まれ、そして、感情についての意識というものが遅れて来るのならば、演技においてもまた、まず身体の動き、ある状況における身動きというものがあればおのずと感情表現につながるのではないか。感情の昂まりを表現することができるのではないか。ところが女優たちは、役柄の感情そのものを意識して思い描こうとし、うれしそうな身振りを意識的に演じ、涙を流すような感情を自身の体験に訴えてわきたてるということを意識的にすることで、悲しみの感情を表現しようとしてきた。すべては、本来遅れたものである意識を始まりに置く誤りから来ている。女優たちはその態度は様々であるが、結局のところ、意識して演じようとしている、こうした〈像〉が浮かびあがってくる。「意識」という言葉こそが女優たちの態度を概念的に把握した言葉だということが見えてくる。女優たちは、もっぱら意識的な方法をもって感情の表現ができる、「感情そのものを演じること」、ができると考えていたのである。

そうとすれば、設問の「感情そのもの」を演じることを捨てねばならぬ」とは、どういうことかについては、「全身で役柄の状況を演じることで感情はおのずと生まれるのであるから、予め意識的に感情のありようを想定して演じてはならない」という趣旨のことを書けばよいということが見えてくるのではないだろうか。

#### 2-4. 2008年度第4問と2011年度第1問を並べてみる

本問は、演劇においては、「身体の動きにまかせて行動すべきことを、意識的にコントロールしようすれば失敗する」という趣旨を語る文章であった。演劇に関わっていない受験生や私たちにとっても自らの「体験の総体」を思えば、「意識的なコントロール」ではうまくいかない、というようなことに思い至ることがいくつもあるはずだ。

ここでは、ひとつ、東大の現代文の過去の問題から、実際の生活の場面でこうしたコントロールが望ましくないような結果を招くことを描いた文章に少し触れておこうと思う。いわば意識と

無意識の問題の変奏と呼べるような問題になっており、東大がいかに意識的なコントロールという、ひとが陥りがちな考え方に強い関心を寄せているのかがうかがえる。

その問題とは、2011年度第1問である（桑子敏雄『風景の中の環境哲学』、東京大学出版会、2005年）。「河川は人間の経験を豊かにする空間である。人間は、本質的に身体的存在であることによって、空間的経験を積むことができる。このような経験を積む空間を「身体的空間」と呼ぼう。河川という空間は、「流れ」を経験できる身体的空間である」と書き始められ、河川の整備、河川を活かした都市の再構築という問題に移る。そして、河川の整備というとき、既知の概念によって管理、コントロールしようと

することの弊害が語られる。たとえば、親水護岸という概念による河川整備は、水辺に下りたり、水辺を歩いたりということはできたとしても、それ以外のことをする可能性を奪われるのである。これに対して筆者は、「完全にコントロールされた概念空間に対して、河川の空間にもとめられているのは、新しい体験が生まれ、新しい発想が生まれ出るような創造的な空間である」として論を展開していく。まさしく2008年度第4問と同じ方向性の考え方が示されているのである。

### 略記号一覧

ドゥルーズの著作については以下の略記号で示した。訳文はそのまま使用させていただいた。頁数については、（原書/邦訳書）の順序で示した。

D : avec Claire Parnet, *Dialogues*, Flammarion, 1977; éd. augmentée, 1996. (『ディアローグ ドゥルーズの思想』江川隆男・増田靖彦訳、河出文庫 2011年)

MP : avec Félix Guattari, *Mille Plateaux: Capitalisme et schizophrénie 2*, Minuit, 1980. (『千のプラトーーー資本主義と分裂症』上中下巻、宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明訳、河出文庫、2010年)

S P P : Spinoza. *Philosophie pratique*, Minuit, 1981. (『スピノザ 実践の哲学』鈴木雅大訳、平凡社、2002年)

本文において、鉤括弧を用いて引用を行う際には、その鉤括弧内で二重鉤括弧を用いず、再度鉤括弧を用いた。

1. [https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/admissions/undergraduate/e01\\_01\\_18.html](https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/admissions/undergraduate/e01_01_18.html)
2. Sur Spinoza Cours Vincennes - St Denis Cours du 24/01/1978(<https://www.webdeleuze.com/textes/11>)

---

## 【研究ノート】

### 主観性の生産と夢

#### ——ガタリの夢のテクストを中心に

有馬景一郎

---

#### はじめに

フェリックス・ガタリは「主観性の生産」という問題を繰り返し取り上げた。主観性の生産とは、精神のメカニズムにおける「美的なものの生成」であり、永遠回帰的な構造を持つ肯定的な変容である（1）。本研究ノートは、ガタリの「主観性の生産」と夢の連関について概観し、主に美的な生成の面からガタリの夢についての捉え方を浮き彫りにする。ガタリは夢に関わるいくつかのテクストを残している。彼は自身の夢を分析し、自己の実存の領土の生成について書いている（2）。その方法は精神分析的な夢解釈とは異なるものだ。また夢について、オーストラリアのアボリジニの論理を参照する（3）。ガタリはアボリジニを専門にする人類学者バーバラ・グロチュスキを二度にわたって自身のセミナーに招いた（4）。グロチュスキのアボリジニを取り扱った博士論文はガタリを参照しており、ガタリとグロチュスキは相互に参照関係にある（5）。また、ガタリはカフカの夢についてのテクストを複数残している（6）。これらの夢についてのテクストにおいて、ガタリは精神分析とは異なる仕方でも夢を肯定的に掘り出している。

#### 第一節 ガタリの夢分析

ガタリは夢についてどのように考えているのだろうか。ガタリの夢の捉え方は精神分析的な夢の解釈とは異なる。ガタリは精神分析的夢についてエネルギー的な一時過程とそれを抑圧する論理の対立として捉えている。ガタリは「存在と意味のリトルネロ」というテクストにおいて自身の夢を分析する。ガタリは夢による意味作用の歪曲化は、機械状のものに関与するという（7）。どうということか。夢における意味の切断や裂け目は「生まれつつある主体化」の表れであり、脱テリトリー化する開放なのである。ガタリにとって夢は「創造的で機械状の連鎖の多種多様な能動的な生の世界」に結びつく（8）。フロイトは夢についてエネルギー的な

流出と意味の自由な変化を「一時過程」と捉えた。そしてそれを拘束、制御する二次過程、あるいは無意識的な欲動とそれを抑圧する検閲と捉えた（9）。それに対して、ガタリの夢の捉え方はむしろ多方向に開かれている。ガタリにとって夢は解釈され意味付けされることよりも、主観性の生産に関わるといっていいだろう。「存在と意味のリトルネロ」においてガタリは独特のやり方で自身の夢を分析する。彼は夢に現れる顕在的な表象のいくつかを「平行したり交叉したり」（10）する方向線を探し出すことに重きを置く。それらの表象とは「町、広場、囲む道路」、「忘れられた車」「ヤシャ・ダヴィッドとジル・ドゥルーズについての言い違い」、「深い淵」そして「嫉妬に関する制止」である。それらの要素は分岐としてさまざまな形で結びつき複数の宇宙を構成する。ガタリは自身の夢を分析し、女性についての愛情やそれについてのためらい、彼が過ごした複数の町、そこでの彼に関わる人々との出会い、同性愛についての意識、ガタリの父の死などが変換され複雑に結びつくことを明らかにした。それらの要素はポリフォニー的に構成される。複数の分岐の結びつきはガタリ独特のシナプス機能という働きによるものだ。そのような状況は非物質的宇宙  $U$  と機械状門  $\Phi$  の関係の仕方によって考えることができる。それらのあらゆる要素の結びつきは、複数の宇宙としていたるところにあると同時にどこにもない、あるいはあらゆる相が区別されていながらその全体が区別されずにある状態である。そのようなガタリの夢は彼の実存にとって重要な核を構成する。彼の夢は「死の不安を払いのける」手段として彼自身の実存の領土を構成する。ここには、ガタリにおける「主観性の生産」のメカニズムが働いている。どうということか。ガタリの方法はこうだ。精神分析的な夢判断は、無意識下における過去の記憶と現在の症例の結びつきを解明する方向に向かう。しかしながら、ガタリは自身の夢を分析し、その中でポリフォニー的な構造と複数の要素が結びつくシナプス的な働きを捉えている。彼の夢は多方向に開かれている。ガタリは夢によって見いだされるいくつかの自身の核の中から能動的な生の世界へ至る線を見出し、死の不安を克服す

る。ガタリは自身の夢を分析することで肯定的な変容を可能にしたのだ。

## 第二節 アボリジニの夢

ガタリは自身の「主観性の生産」という概念を練り上げる時に、さまざまな概念群を用いる。アボリジニの論理や夢の技法について検討することは、ガタリはアボリジニの概念群について理解を深める上で有効であると思われる。ガタリはアボリジニの論理を参照している。とはいえ、アボリジニを主題にした論考があるわけではない。そこで、グロチュスキを招いたセミナーの講演録とそこでのガタリのコメント、およびグロチュスキのガタリについての論考を検討する。

ガタリが参照するアボリジニの夢はどのようなものだろうか。アボリジニには「ドリーミング」といわれる集団的な夢見の技法がある。グロチュスキの研究はその「ドリーミング」について論じたものである。アボリジニの夢の捉え方は独特であり夢は非常に多義的な意義を持つ。本節においてはグロチュスキの研究を網羅することはできないので、ガタリに招待された講演録で述べられたアボリジニの夢見技法について特徴的な部分を取り上げる。グロチュスキの研究はアボリジニのワルピリ族における彼らの夢見の技法を取り上げる。彼女によれば、夢は現在であり、とても遠い過去、歴史的な時間ではなく変態の時間であると言われる（11）。他方で夢は神話でもある。夢はわれわれ人類にだけみられるものではなく、自然や文化に存在するものはすべて夢がある（12）。夢はある意味での創造であり、あらゆる可能性の貯蔵地である（13）。夢はあらゆる元素の組み合わせである。しかしながら、夢は不連続性をもち、意味付けしない仕方でのつながりを持つ（14）。夢は集団的準拠としてワルピリ族の行動を規律し、実在の領土と切り離さない。

ワルピリ族は領土についての捉え方も独特である。彼・彼女らは領土を所有するのではなく彼・彼女らが領土に属するという（15）。そして時間と空間は切り離してとらえることができない。つまりある時間や場所はその時間や空間だけを取り出すことができず、その固有性を持つと言えるだろう。また、彼・彼女らはワルピリ族に伝わる特異な伝達の方法を用いる。彼・彼女らは手の言語を用い、砂に描かれた図表でやりとりを行う（16）。また夢やダンスは、彼・彼女らにとって記憶の伝承方法でもあるのだ（17）。記憶について身体を介した集団的方法を駆使しているともいえる。また、彼・彼女らが伝達するのは意味的なものだけではない。非意味なコミュニケーションを行っている。逆に彼・彼女らのメッセージは作った人から言われた場面に結び付かな

いと理解できない。そのような夢見の技法あるいはコミュニケーションの方法についてガタリは「非意味的な風景の構成」そして、「内容の自己利用」と表現している（18）。彼・彼女らの主観性はこのように集団的に構成される。

ドリーミングは「ドリームタイム」とも呼ばれることがある。ロバート・ローラは浩瀚な『アボリジニの世界』の中で、ドリームタイムを「存在の絶対的根底ないしあらゆる差異を生み出す根本的宇宙的な連続体」と捉えている（19）。保莉実はドリーミングについて、あらゆる時間、歴史、大地、規範、正しい道といったような複合的な側面で捉えている（20）。デボラ・B・ローズはドリーミングが歴史であり物語であり創造主であると述べる（21）。このようにアボリジニのドリーミングは、非常に複合的な側面を持つ。

アボリジニの人々は夢を非常に多面的な側面を持つものとして利用する。彼・彼女らにとって、夢とは寝ている時に見ているものでありながら、過去と現在を即時的につなぐ時空間の座標でもあり、実際のオーストラリアの大地に描かれた移動の行程に結びつき、まさに彼・彼女らの実在の領土を構成するものであり、一族の集団的な生活の仕方を規定するものであり、それ以上にどのように生きていくのかという倫理的な在り方をも含むものである。アボリジニの夢は、ガタリが後年主張する「三つのエコロジー」という環境だけにとどまらない、主観性や社会の領野を含めたエコロジーの一つのモデルを提示しているとも言えるだろう。アボリジニの夢の利用の仕方は、夢は解釈されるものだけにとどまらず、生き方の指針のようなものになると同時に実在の領土にもかかわるのだ。

## 第三節 ガタリによるカフカの夢分析

ガタリはカフカの夢のアンソロジーの中でカフカの夢を分析する。カフカは彼の作品と日記や書簡を何度も往復する。カフカは精神分析による夢の解釈に興味を持つものの、遂にはそれに満足しなかった（22）。カフカは自分で夢を分析し始める。そして自分の夢を近親者に手紙で送り、さらに彼らに対して夢を送ってもらうように頼む。ここには複数の人物による夢の共同作業が伺われる。カフカは夢の中で「意味をなさない地点」を「増殖、拡大」させ、「別の想像的構成、別の考え、別の人物、別の精神的座標」を生み出そうとする（23）。このことをガタリは「主観性の生産」として捉える。主観性の生産とは、精神のメカニズムにおいて、美的なものが生成されることである。ガタリにとって美的なものとは特異な質の生成と変幻する座標の二つのものの生成である。カフカ作品における夢の中の特異点は、時間、空間、身体、

意志などの変容に対応し、「カフカ的な物語に固有の《世界の変化》」に影響を及ぼすとガタリは考えていた(24)。ガタリはカフカの作品に「過程的」な作用を見出す。カフカの作品の「根本的な未完成性」あるいは「恒常的な不安定性」が読者の心中に過程的な作用を引き起こす(25)。カフカ作品から生じる謎の効果や永遠の曖昧性は「非シニフィア的な過程」の横断する線として見出されている。カフカの作品から与えられる謎や曖昧さはカフカ作品を読むものにとって残り続け、カフカ読者の主観性に影響を与える。ガタリにとってカフカは「無意識の形成の正真正銘の分析家」である(26)。カフカの作品において、「突然何かあるものが作動して、増殖し始め、そのあるものがそれ自らのためにのみ存在し始める」(27)。このような過程をガタリは精神病の道程に少し似ていると考える。

ガタリはカフカが夢の特異点をどのように扱うかという技術について三つの形で図式化する。第一の図式は「小さな出来事が《大きな破局》を引き起こす」ものである(28)。これは作品においては『判決』のゲオルク・ベンデマンが身を投げたり、『変身』のグレゴリー・ザムザが悪夢のような状況に見舞われることである。第二の図式は夢のテキストと文学的テキストが識別不可能になることである。ガタリは『訴訟』においてそのような図式を見出す。そして破局的な結末ではなくむしろ過程／訴訟から癒される結末へ導くことが可能であると考え。第三の図式は、ささいな出来事が物語を推し進める原動力となることである。特に『城』の執筆中にそのような文学的過程の成熟が見られるという。ガタリはこのようなカフカの夢を取り扱う仕方を彼の文学創作と密

接に関連があると考え。あるいは、夢について書き記し、書簡で送ることは、作品の異本のようなものとして成立する。

カフカの夢のプロセスは、ガタリがCSで明示した主観性の生産のメカニズムとして捉えることができる。何かあるものの作動とは、「表現機能」による可能的な領域への開放である。増殖しはじめるとは、フラクタル化あるいは積分という作用による輪郭線の変形である(29)。それ自らのためにのみ存在し始めるとは、実在の領土と非物体的宇宙が結びつく異質生成である。このようにガタリはカフカの作品やその創作過程をまさに「主観性の生産」の具体的な例として考えていた。

## おわりに

ガタリが夢について述べたテキスト、および彼が関心を抱いていたアボリジニの夢について検討を重ねてきた。両者の検討によって明らかになったことは、精神分析的な夢の捉え方とは別の仕方でも夢を扱うことができるということだ。ガタリは夢を過去の記憶として捉えて、それを解釈するだけではない。むしろ、ガタリは夢が実存の領土の構成にかかわるあり方を明示したといってもいいだろう。検討すべき部分はまだまだ多く残されているが、ガタリの夢についての捉え方を明らかにし「主観性の生産」の具体例として夢の利用の仕方を提示することで本稿の目的は達したと考える。

## 註

1. 本稿は執筆者が2021年に放送大学大学院に提出した修士論文「フェリックス・ガタリの『分裂分析的地図作成法』における四機能素の研究 美と永遠回帰の観点から」における論点を基に、修士論文では検討されなかった観点からの検討を行うものである。執筆者の修士論文は刊行予定の『放送大学文化科学研究』(The OJ Journal of Arts and Sciences) 第2巻に、その内容が掲載予定である。
2. Félix Guattari「存在と意味のリトルネロ(A・Dの夢の分析)」*Cartographies schizoanalytiques*, Galilé, 1989. 『分裂分析的地図作成法』 宇波彰他訳 紀伊國屋書店、1998。以下、CS。CS, pp.235-249, 295-312頁
3. *ibid.*, p.92, 112頁, p.240, 312頁。Félix Guattari *Chaosmose* Galilé, 1992. 『カオスモーズ』 宮林寛他訳、河出書房新社、2004年。以下、Ch。Ch, p.31, 213頁。
4. バーバラ・グロチュスキの著作あるいは論文は多数刊行されている。翻訳は「ガタリと人類学 アボリジニと実存的領土」現代思想 44(5), 113-127, 2016-03 青土社 がある。本稿で参照したグロチュスキのセミナーは“Les Warlpiri, I & II séminaires 1983 & 1985” *Chimères* ; N° 1, 1986. (以下 Warlpiri) [https://www.persee.fr/doc/chime\\_0986-6035\\_1987\\_num\\_1\\_1\\_1019](https://www.persee.fr/doc/chime_0986-6035_1987_num_1_1_1019) (最終閲覧日 2022年12月30日)
5. 「ガタリと人類学 アボリジニと実存的領土」116頁。

6. フェリックス・ガタリ 『カフカの夢分析』ステファン・ナドー編注 杉村昌昭訳 水声社、2008年。
7. CS, p.235,295頁。
8. *ibid.*, p.248,311頁。
9. フロイト 『新訳 夢判断』大平健編訳 新潮社 2019年。
10. CS p.242, 303頁。
11. Warlpiri, p.7.
12. *ibid.*, p.16.
13. *ibid.*
14. *ibid.*, pp.18-19.
15. *ibid.*, p.9.
16. *ibid.*, p.8
17. *ibid.*, p.20, p.25.
18. *ibid.*, p.22.
19. ロバート・ローラ 『アボリジニの世界』青土社、2003年。357頁。
20. 保莉実 『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』岩波書店、2018年。
21. デボラ・B・ローズ『生命の大地 アボリジニ文化とエコロジー』保莉実訳 平凡社、2003年。
22. 『カフカの夢分析』34頁。
23. *ibid.*, 36頁。
24. *ibid.*, 51頁。
25. *ibid.*, 72頁。
26. *ibid.*, 148頁。
27. *ibid.*, 150頁。
28. *ibid.*, 57頁。
29. 執筆者はガタリのパルテュス論を取り上げて「フラクタル化」という動きについて報告を行った。於社会芸術学会 2022年7月30日オンライン。

## 執筆者紹介（あいうえお順）

有馬景一郎 ガタリ研究

伊藤 幸生 会社員

西川 耕平 慶應義塾大学 非常勤講師

山森 裕毅 滴塾第二学舎 舎長

## 編集委員（あいうえお順）

内藤慧

## 掲載規約

本誌は、DG-Lab の 2021 年の活動報告、メンバーによる研究報告、そして関連イベントの報告（依頼執筆を含む）を収めている。掲載された文章はいずれも、DG-Lab におけるミーティングで合意された規約に則り、DG-Lab に投稿され、掲載が許可されたものである。掲載の許可は、掲載への反対がないかぎりにおいて DG-Lab のメンバーの総意にもとづくものである。

# hyphen no. 7

2023 年 1 月 14 日発行

編集 『hyphen』編集委員

発行 DG-Lab

<https://dglaboratory.wordpress.com/>